巻頭言

『国語教室』一〇〇号に寄せて

北原保雄（きたはら やすお）
筑波大学名誉教授
新潟産業大学学長

『国語教室』発行が三五年近く継続し、一〇〇号の記念すべき節目を迎えた。しかも、現在も元気に成長しつづけ、毎号が充実している。創刊から関わってきた者として、我がことのように嬉しく喜ばしい。その間、国語教科書の編集刊行も順調で、現在に至っている。編集部、教科書編集委員の皆さんの努力によるものであり、まずもってその労苦を多とし感謝の意を表したい。また、多くの先生方の強力なご支援とご協力があったからこそであり、ここで改めて感謝申し上げたい。

本誌第一号の発行は昭和五五年（一九八〇）二月一〇日の日付になっている。昭和五三年に新学習指導要領が告示されて一年余が過ぎ、学校の現場ではそれへの対応がいろいろ検討されている時期だった。昭和四五年告示の従来の学習指導要領を基本の考え方から変更した大改訂だった。「ゆとり教育」などと呼ばれ、必修が「現代国語」「古典Ⅰ甲」「古典Ⅰ乙」の三科目だったものが、「国語Ⅰ」一科目だけになった。必修の単位数も大幅に減少した。そういう時期に大修館書店が教科書編集に立ち上がり『国語教室』が創刊の運びとなったのだった。第一号では、私が司会をして、六人の先生による座談会「新学習指導要領にどう対処するか」を載せている。

座談会はほぼ毎号に掲載され、私自身もしばしば参加しているが、登場者の写真の顔は皆さん若くて懐かしい。中にはすでに物故した人もいて、時の経過を思い知らされる。第一一号（昭和五七年四月発行）に掲載された増淵恒吉氏との対談「国語科教育の今昔」は新学習指導要領が実施される直前のものだが、その時の「今」は現在では遠い「昔」のことになっている。あれから学習指導要領も3回改訂された。

最初のころは、教科書編集にも宣伝にも、そして本誌の編集発行にも熱が入っていた。当時は年5回もしくは4回発行され、内容も充実していた。私自身も若くて元気だったので、頼まれて全国に講演に出かけたし、本誌にも「理解と表現」や「Ｑ Ａ文法セミナー」を長期連載し、その他多くの文章を書いた。国語教育関係においては、本誌を通して育てられ、また本誌を育ててきたようなところがある。

自分のことはともかく、本誌は皆さんに育てられ、また、皆さんのお役にも立ってきたのではないか。多くの皆さんの教材研究や実践報告を載せ、意見や提案を掲載し、また識者の論を載せ、情報や知識を紹介するなど、編集委員、編集部と現場の皆さんとの交流の場、まさに「国語の教室」としての任を立派に果たしてきたのではないかと思う。

この一〇〇号を一つの節目として、教科書の編集作成側とそれを使って教育の実践を行なう側との連携、交流の場として、さらに充実、発展することを期待したい。

●きたはら　やすお
1936年生まれ。日本語学者。大修館書店教科書編集委員代表。主な編著書に『日本語助動詞の研究』『明鏡国語辞典』『日本語の助動詞』（以上、大修館書店）など。

私はこう考える
これからの国語教育に求めるもの

めまぐるしい速さで変わり続ける現代社会。世の中のニーズも変われば、生徒をとりまく環境も変わる。現在の日本の姿を見据えたとき、これからの国語教育に必要なものは何か。国語科の授業には何が期待されているか。各界で活躍中の方々にうかがった。

評論の実践を導入せよ

東（あずま） 浩紀（ひろき）
作家・思想家

二〇年ほど批評を書いている。大学でも一〇年ほど教えた。その経験から思うのは、日本の国語教育、それも初等教育に、論理的な文章を「書く」機会をもっと取り入れるべきだということである。最初は数百字でもいい。読者、それもこちらの主張を理解しない読者に対して、どのように説得を組み立てるか。全体の何割を書きだしに、何割を本論に、何割を想定される異論への反論にあてるのか。そのリズムは読むだけでは体感できない。自分で書き、読者に「誤解」されることを経験し、トライ&エラーを繰り返すほかない。野球を見るのと野球をやるのがまったく異なるのと同じである。日本ではしばしばディベート教育の必要性が話題になる。しかし口頭の議論は「外見」「気合い」に左右されるところが大きい。文章の勝負はそうはいかない。そして論理の組み立ては言語によらない。グローバル社会に対応するためにも、評論の執筆教育が急務である。

「グローバリゼーション」の意味するものは

姜（カン） 尚中（サンジュン）
聖学院大学学長

グローバル化が避けられない勢いで進み、あたかもドルが事実上の基軸通貨とみなされるように、英語が基軸的な言語の地位を確立しつつある現在、国語教育はどんな新しい課題に直面しているのだろうか。例えば、「グローバリゼーション」というカタカナ語が氾濫しているが、その意味となるとほとんど曖昧模糊としたままで、同じ言葉でほとんど違った意味を籠めている場合もある。

言葉は、コンテクストに応じてその意味が変わってくるにしても、その意味が余りにも多義的な外来語の増殖は、国語教育の上にも様々な混乱をもたらすことになりかねない。そうした場合、例えば、グローバリゼーションを「地球化」と翻訳し、国語の語彙の中に位置づけ直していくべきだろうか。これからの国語教育は、そうした新たな外来語あるいは翻訳語の拡大・浸透にどのように柔軟に対応していけるのか、その力量が試されているのである。

身体を作り直す音読

小池昌代（こいけまさよ）
詩人・小説家

樋口一葉の名は高いが、その作品を私たちの多くは読めなくなっている。和歌についても然り。古文や雅俗折衷体は現代人には外国語にも等しい。意味に躓（つまず）き続ければ挫折する方がむしろ自然だ。しかし放置すれば、流れが途絶える。日本語の厚みも薄っぺらいものになるだろう。私の場合、その壁を破ってくれたのが音読だった。人の音読を聞いたり、自分でも音読したり。こんなに楽しいのかと開眼した。読めなくてもいい、現代語訳があるという考えもあるが、歓びの深度が違う。意味を追うのはずっと後でいい。なんなら個人学習に任せても。現代詩・現代小説は黙読を前提に作られているものが多い。つまり個々の脳内に、直接世界を立ち上げる。近代以前の日本人は文字の読み書きにおそらく今よりずっと身体を使った。同じ日本語でも、古典を読むには身体を作り直す必要を私は感じる。そして身体を変えるには、もちろん意識から変える必要がある。

上手いコピペこそ国語の真髄

斎藤　環（さいとう　たまき）
精神科医

これからの国語教育を考える上で必須なのは「コピペ（コピー＆ペースト）」の技術である。コピペはカンニング同様、けしからん学生がするものと誤解されているが、けしからんのは「下手なコピペ」だ。上手いコピペを作る過程には、読解から批評、創造に至る国語の神髄がすべて入っている。ほとんどの小説、漫画、映画作品が〝引用の織物〟となった現代、〝完全なオリジナル〟信仰は意味を持たない。コピペにこそ創造性の萌芽が宿る。生徒に作文を書かせる際に「ネットからのコピペで作る」という制約を課してみよう。ただし「ありのままの」コピペはもちろん最低点（検索でバレる）。ネタ元はわからないが文章としての完成度が低ければやりなおし。ネタ元が割れずに完成度の高い文章を作れたものが最高点だ。優秀な生徒には、他の生徒にネタばらしと切り貼り＆加工のノウハウを伝授してもらう。教師にとってもＩＴスキルを学ぶ機会となろう。

非言語情報の重要性

竹内一郎（たけうちいちろう）
劇作家・演出家

『人は見た目が9割』（新潮新書）を上梓し、非言語コミュニケーションの重要性を訴えて、10年が経ちました。音声、表情、しぐさ、衣服など「言語以外の情報」を総称して、「見た目」と定義して論を進めたので、随分誤解も受けました。

しかし、最初に支持の声を上げてくださったのが教育界です。たとえば、世界史の授業で定評のあるA先生の授業を録音して、テキストデータに落とし、カーナビのような気持ちのこもらない声で生徒に聞かせても、A先生の授業の本質が伝わるでしょうか。

私は8年前から毎年、独立行政法人「教員研修センター」で教授法に関する講義を行ってきました。各県教育界のリーダー的存在が、夥（おびただ）しい人数私の説に賛同してくださっています。文科省は早くから非言語コミュニケーションの重要性に気付いていたのです。国語教育では、せめて「音声言語」の側面を強化していただきたいと切に念じます。

「国語の時間」だからこそできること

宇野常寛（うのつねひろ）
評論家

今でこそこうして文章を書いて生活している僕ですが、国語の授業にはいい思い出はありません。そこは比喩的に述べれば読書感想文ではヘッセの「車輪の下」を自らの受験プレッシャーに重ねて語るような生徒が、弁論大会では部活動での体験を通して仲間と努力の大切さを訴えるような生徒が持ち上げられる場であり続けました。そして今こうして文筆や出版の現場にいる人間として考えると、この種の学校優等生的な過剰適応はむしろ想像力の貧困と同義であり、要するに（僕の体験した）国語の時間は「つまらない人間」の量産工場だったと言っても過言ではないでしょう。

しかし、僕は思います。本来国語の時間とは、いや国語の時間こそは、こうしたお役所的建前や世間的体裁から自由であり得る領域が、世界には、文化空間には存在し得ることを制度的に生徒に教え得る数少ない機会ではないでしょうか。

言葉とスポーツ

為末（ためすえ） 大（だい）
㈳アスリートソサエティ代表理事

私達スポーツの世界は言葉にできなくても、身体でできてしまえばいい。なぜ速く走れるかを説明できなくても走ってしまえばそれで金メダルを取れる。だから言葉がいらないという人もいる。

けれども無用なはずのその言葉で動きを表現できた途端、動きにおいても鮮明に意識されるときがある。できたことを言うだけではなく、言えることでできるようになるということも、私達の世界では時々起きる。

私達は言葉にできた時に、初めて自分の内面や心のありように気づくときがある。既にあるものではなく言葉によって内側にぼんやりとしてある何かが立ち上がるときがある。言葉にした途端自分でもはっとして気づくときがある。

国語教育には、言葉を教える時に、言葉を使うことで自分でも気づいていなかった自分を知ることができるということもぜひ伝えていってほしい。

授業で学んだ先にあるもの

中江有里（なかえゆり）
女優・作家

高校時代には、古典や名作など一見とっつきにくいと思われる作品に触れることが大切だと思います。ですから、極端に言えば意味が分からなくても、読んで心に刻みつけておく訓練を国語教育には残していってほしい。

勉強は、学んだときがスタートです。そこで終わりになるものではありません。高校時代がスタート地点だとしたら、ずっと後になってその時学んだことが自分の中でカチッとはまることもあるのです。

私も高校生の頃は、漢文を意味も分からないままパズルのように読み下して楽しんでいました。でも、大人になってから、過去にこれを書いた人がいたのだ、誰かが誰かに読んでもらいたくてこの世に作品を残したのだ、と思うと、すべてが自分につながっていると思えるようになりました。

読むことは確実に人生の助けになる。そのために国語教育にできることはとても大きいと思います。（談）

※「WEB国語教科書」で特別記事を公開しています。

言葉は通じない

長谷川櫂（はせがわかい）
俳人

現在の国語学習は古典も現代文も「読解」が中心です。子どもたちは誰かが書いた文章を読まされ、もし読み解けなければ、それは子どもに読解力がないと判定されます。古典はこれで結構。

しかし現代文ではだめ。これだと子どもたちは文章は書けばわかってもらえるんだ。わからないのは読み手がわるいんだと思うようになる。その結果、言いっ放し、書きっ放しになる。この風潮が友だちづきあい、家庭生活、社会生活、外国との交渉などでどれほど支障をきたしているか。

言葉はたしかに最大の意志疎通の手段だが、言いっ放し、書きっ放しでは絶対に通じない。それどころか誤解を招くということをしっかり学んでほしい。そこから子どもたちは言葉の選び方、言い方、書き方を自分で工夫するようになる。

「言葉は通じる」ではなく「言葉は通じない」。これが言葉とのつきあいの原点です。

「手書き」廃止論

古市憲寿（ふるいちのりとし）
社会学者

僕は、国語教育の現場から手書きというものをなくしたほうがいいと思っている。硬筆や習字など文字自体の技巧を学ぶ場は残ってもいいが、作文や小論文を手書きで書かせることには特に反対したい。それは、手書きというものが現代社会において、あまりにも不自然になってしまったからだ。

大人になってから、長文を手書きで認める人はほぼ皆無だろう（林真理子など特殊な例を除く）。多くの人は、キーボードやタブレットなどで文章を書く。作法は手書きのそれとは大きく違う。カットアンドペーストが自由にできるし、漢字をいちいち覚えておく必要もない。だが、今でも教育現場では、おそらく手書きが当たり前。教育の場と、社会の状況があまりにも乖離しているのは不健全だ。

もちろん、予算などの問題ですべて手書きを即座に廃止することは無理だろう。しかし、少しでも国語教育の場と社会の常識が近づくことを願っている。

〈座談会〉

国語教育の未来を拓く

――言語活動のさらなる充実を目指して

言語活動の充実、入試のあり方、古典の扱い……。若い先生方へ向けて、視学官や教科書調査官経験者の先生方に、これからの国語教育について語り合っていただきました。

鳴島甫
田中孝一
西辻正副
島田康行
山下直（司会）

目的をもった言語活動

山下◆ 本日の座談会は、指導や入試の問題などについて、現場の先生方の悩みに何か応えられるようなものになればと思っています。

高校は特に、それぞれの学校によって異なる事情があると思いますが、まずは、言語活動をいろいろやってみたいと思っているけれど、どうやっていいかわからないというような若い先生方に、何かヒントとなることについてお話しいただけますか。

田中◆ 言語活動といわれても、国語科は言語能力を育てる教科だから、言語活動をするのは当たり前だ、意識しなくてもやっているのにことさら何をすればいいのかというところに、先生方が戸惑われる要因の一端があるようです。

言語活動のポイントは、こういう能力を育てるために、こういう言語活動をするということを意識することです。まず目標を設定し、その実現のために意図的、意識的、計画的に言語活動を設定することですね。

西辻◆ その通りだと思います。例えば要約をするなら、**そのときどういう目的をもって要約するか**を意識することが大切です。社会生活において、無目的に何かを書くことはありません。話すこと、聞くこと、読むことも全部含めて、ある意図や目的をもってやっています。

鳴島◆ 「要約」というと、何か要約の方法というのが決まっているように思われていますが、ちょっと考え方を改めたほうがいい。それはあくまで入試のための要約なんです。そうではなくて、何のために要約するのかを意識しないといけない。目的によって方法も違ってくる。例えば調べ学習の結果をクラスのみんなに紹介するためには、どのようなまとめ方をしてたら伝わりやすいかなと考えさせる。そういった一つの目的と、それをやったことによる成果が目に見えて出てくる活動によって、要約の力はつけられるんです。

田中◆ 教科書の『羅生門』に、「この小説の結びの部分からどのような印象を受けたか、四〇〇字程度でまとめてみよう」という学習課題がついています。このような課題を扱う際にも、読みを深めるためにやるのか、それとも書く力をつけるためにやるのか、指導者がきちんと目的を考えておかないといけません。

先日、岩手県の研修会で、先生方に、一学期に作ったペーパーテストの問題を見せてもらったんですね。すると、ある先生が、自分の作成した問題の小問それぞれについて、語句の意味、内容理解、指示語、表現などの位置づけを書いたペーパーを持ってきていたんです。これはとてもいいことだと思います。ただ、「生徒に配って説明したんですか」と聞くと、「いや、この研修に出てくるために作りました」と。これではもったいない。生徒に学習の目的や位置づけをきちんと説明すると、もっと理解が深まると思います。

鳴島甫（なるしま　はじめ）
筑波大学名誉教授。大修館国語教科書編集委員。2003年文部科学省視学官（併任）。1999・2009年『学習指導要領解説』作成主査。

山下◆ 学習の目的を生徒とも共有することが大切なんですね。

西辻◆ 先生だけが見通しをもっている授業はブラックボックスです。「意外感を与えられる」「全部示していると面白くない」などとおっしゃるかもしれません。だけどやっぱり一定程度、**見通しを生徒にわかりやすい言葉で示していくこと**が大切だと思います。

島田◆ 国際バカロレア（→二八頁）の導入が進められていますが、生徒に示す評価基準をまとめたルーブリック（一覧表）がよくできている。そういうものも、生徒へ見通しを示す際の参考となるかもしれません。

田中◆ 教科書についていえば、現在は、ほとんどが、教材があって学習課題が後ろにあるという構成だと思います。この形はなじみのあるものですが、これだと、裸の教材と学習課題が並んでいる状態です。この単元はこういう能力をつけますよという高校生向けの解説とともに、学習を前において教材本文を後ろにするなど、もっと目的を明確に示す工夫をしてもいいですね。

鳴島◆ 小学校の教科書は、田中先生がおっしゃったような順番になっていますね。

西辻◆ 教科書を使う際には、先生方がまず目的をもって、能力ベースでシラバスを考えて、それにふさわしい教材を教科書の中から選ぶという形が一番いいように思います。

プロセスの重視と入試

山下◆ 先ほど、鳴島先生が「入試のための要約」とおっしゃいましたが、現場の先生は、言語活動は大切だけど入試があって…、と思うこともあるのではないでしょうか。

島田◆ 大学に入ってからどのような言葉の力が求められるのか。あれやこ

れやと考えてみると、実は、高校までの学習指導要領の中で明確に位置づけられていることばかりなんです。**大学で必要とされる力は、高校までで伸ばそうとしている力とかなりリンクしている。**だけど、大学入試だけがちょっと違っている。だとしたら、入試はその結び付きの邪魔をしないで、むしろ高校の学習指導に資するようなあり方というのを考えなければいけない。国語の先生方にとっては、大学入試を意識しなくてもいいような指導のあり方が、本当は一番いいのだと思います。

鳴島◆　いまだにペーパーテスト対応の学力になっているのが問題なんです。社会に出ると、議論したり話し合ったりしながらあるものをつくり上げていく能力は、とても大切なはずです。それをペーパーテストでは測れないからやらないという状態になっています。でも実際に社会人になったときに、話せない人って、とても悲惨な目にあうことになる。だからやっぱり、そういう力をつけてあげないとかわいそうだと思います。

西辻正副（にしつじ　まさすけ）
奈良学園大学副学長・教授。2003～2014年文部科学省教科調査官、2012年同視学官、2013年同主任視学官。

西辻◆　結局ペーパーテスト対応になってしまうと、生徒の学習が受け身になってしまう。いろいろ話し合いをしたり、考えたりするんだけど、最後に先生が正答らしきものを言う。すると生徒はそれまで書いていた自分の答えを消して、それを書き写す。そんな授業が後を絶たないんです。さらに、授業で『羅生門』を扱ったら、定期テストでも『羅生門』を出します。それは結局、正答らしきものの暗記テストなんです。違う教材を取り上げて、ねらいとした能力がついているかどうかを見るという発想も必要だと思います。

「定期テストでは点が取れるのに、校外の実力テストでは取れない」という話もよく聞きますが、私は「それは結局、日ごろそういう授業をして、そういうテストをしているからじゃないんですか」って言うんです。

学力を点ではなく線で、長い「プロセス」で考えることが必要です。だから、入学試験がすべてという受け身の学習から、課題解決に向けた生徒の主体的、協働的な学習へと、転換をしていかないといけないと思うんです。

田中◆　入試について言えば、センター試験に代わるものとして達成度テストが検討されていますが、複数の教科、科目の内容を横断するような出題をし、評価も一点刻みではなく、いくつかの段階、ゾーンで示そうとするものようです。入試で求められる力も大きく変わろうとしていると感じます。

島田◆　入試を免罪符にはしてほしくないですね。入試があるから、このようにやらざるを得ないと言うんだけど、では入試がなかったら、入試で求められるものが変わったら何をやるのか。本当にやりたい授業とは何なのか。常に考えていてほしいと思います。

他教科との連携

山下◆　受け身の学習から、主体的な学習への転換の中で、準備時間や授業時間が足りないという悩みも出てくると思いますがいかがでしょうか。

西辻◆　言語活動の充実が言われるようになって、理科や家庭科など、いろいろな教科でレポートを書いたり、プレゼンをしたりという学習が行われるようになりました。それを利用しない手はありません。例えば、論理の展開や構成が工夫されているかどうか見ていく場合などに、他教科で書いた文章をどんどん使っていけば、国語の中で書く時間は短縮されます。**教科を超えて先生方がチームワークを発揮してほしい**と思います。

田中孝一（たなか　こういち）
川村学園女子大学教授。1996～2003年文部科学省教科調査官、2004～2006年同視学官、2006～2013年同主任視学官。

山下◆　時間が少ない中でやっていくために、国語科の中だけではなく、教科を超えて、情報を共有していくという発想の転換が必要なんですね。

西辻◆　柔軟な発想と先生同士の協力ができればいいのだけれど、教科の壁がものすごく高い。違う教科から自分の教科に手を出されたくないんです。だけど、別に指導内容に手を出すわけではないのだから。うまく協力すればいいように思うんだけれど、なかなか難しい。

島田◆　この前のセンター試験の英語の問題に、「次のパラグラフ（段落）の中で、まとまりをよくするために取り除いた方がよい文が一つある。それはどれか」という問題が出ました。つまり今の高校生は、段落とは何かということを英語でも学んでいるわけです。ところが、段落を書けと言われると、大学生でも戸惑う者が多い。英語は英語、国語は国語と思ってしまっているんです。目の前の生徒は、他教科ではそういうことも勉強しているんだということを、先生も知った上で指導したほうがいいように思います。

田中◆　文章表現の指導に、古典を使ったっていいんです。例えば徒然草の「花は盛りに」は、教科書で二ページぐらいあります。でも結局これは何を言っているかというと、「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは」という一文に尽きる。この一文を言うために他の部分はあります。文章の最初か最後に自分の言いたいことを一文でピシッと述べる。一番シンプルな文章の書き方とはこういうものです。

鳴島◆　高等学校の先生は、大学で文学をやっていたり、日本語学をやっていたりした人が多い。それが専門だと思っていて、そこからなかなか抜け出せない。もうそういう時代じゃないと思うんだけど。もう少し、専門以外の大きな視点から見直してみるために

島田康行（しまだ　やすゆき）
筑波大学教授。大修館国語教科書編集委員。1994～1999年文部省教科書調査官。

も、学習指導要領をもっと読んでほしい。小学校から見てくれれば、それこそプロセスを重視しながら、どのような力を育てようとしているのかわかるはずなんです。特に若い先生方には、ぜひお願いしたいです。

西辻◆　生徒が食いつくような授業の工夫は、なかなか一人だけでは思いつかないものです。いい教材や授業の工夫は、校内や県内の他校とも共有していけたらいいと思います。

　群馬県のある県立高校では、国語科以外の先生も含めた全教員で四人ずつぐらいのグループに分かれて授業研究をしていました。そうすると、例えば理科の先生や体育の先生が、「こういう授業だったら古典が好きになったかも」などと言う。そういうところに授業改善のきっかけはあると思います。

山下◆　他教科の先生が見ても面白いと思える、ということは大切ですね。

今に生きる古典

山下◆　古典のお話が少し出ましたが、古典教育はこれからどうなっていくのでしょうか。

西辻◆　私自身が一番危機感を持っているのは、英語教育が大きく変わる中で、古典だけが取り残されるのではないかということです。古典の授業は、よく皮肉を込めて、まるで外国語の授業のようだと言われます。現代語訳をして、文法や語彙だけを勉強するのが古典の授業だと。日常の言語生活の中で、**いろいろな古典の言葉が今に生きているということ**を、もっと主体的に体験させたらいいのにと思います。

田中◆　例えば活用形を教えるにしても、今の「ら抜き」や「さ入れ」言葉といったものと一緒に教えるといいですね。この接続はこうなっているから、「ら」が抜けたり、「さ」が入ったりするとおかしいんだよ、だから公的なところでは使わないんだよと。このように教えると、現在の問題と古典がつながります。そうすると、生徒は、なるほどと思う。そのような理解のために古典文法も役立てればいいと思います。

西辻◆　文法だけしかやらないというのが駄目なんです。昔の人が考えていることも、今とよく似ているんだと感じられることが大切です。

田中◆　例えば、日本史の建武の「親政」や、封筒に書く「親展」。漢文で「親（みずから）」という言葉を習っていれば、そういう言葉の意味がわかる。「いわゆる（所謂）」など、漢文と古典文法両方由来の言葉もある。古典の言葉がそのまま現代に生きているんです。

鳴島◆　相変わらず、精密な読みばかりになってしまっていることは気になります。状況や目的に応じて、ざっと読むときはざっと読めばいい。英語では、訳を全部きちんとやるなんてことはもうしません。

西辻◆　英語はいろいろな批判を受けながらも大きく変わってきました。古典も、古典のシャワーを浴びせるように、古典そのものをどんどん読ませたり、複数の訳を与えて、読み比べさせたりと、いろいろな工夫をしていかないといけないように思います。

島田◆　卒業してから国語で何を勉強したのかと振り返ったときに、「花は盛りに」をただ読んだということではなく、その教材でどういう力がついたかということを思い出せる授業になるといいですね。それは古典でも、現代文でも同じだと思います。

これからの国語を担う先生方へ

山下◆　最後に、若い国語の先生方に向けてメッセージをお願いします。

島田◆　高校を卒業した人が、国語の学習指導要領の指導事項について、どれぐらい指導されたと思うか調べてみたところ、ほとんど、読むことの指導事項しか指導された記憶がないという結果でした。

　国語の授業って学生は結構覚えているものなんです。そういう彼らが、後で振り返ってみて、いろいろな言葉の力がついたなあと少しでも実感できるような授業を心がけていただければと思います。

西辻◆　ちょうど世代交代の時期で、若い先生が、どんどん増えていくと思うんです。そういう先生方一人一人が孤立するのではなくて、学校の中でみんなで一緒に協力する、コラボレーションとコミュニケーションを大切にしていってもらえればと思います。経験豊富な先生方は、若い先生方と一緒に、これからの時代の国語を考えていってもらいたいと思います。

山下直（やました　なおし）
文教大学准教授。大修館国語教科書編集委員。2000～2014年文部科学省教科書調査官。

田中◆　生徒たちが、入学してから卒業するまでに、どのような教育課程のプロセスを経て、育てるべき国語力を身につけさせるのか、ということを常にイメージしてほしいですね。また、国語の授業づくりについて、校内外にいつも目を開いて、貪欲であってほしいと思います。

鳴島◆　先生になる人はやはりできる人なんです。だけど、できない生徒はたくさんいる。だから、生徒の実態をよく見てほしい。一年生が入学してきたときに、どのくらいの言葉の力をもっているのか。ペーパーテストで測れる力だけではなく、話をさせるとどのくらい話せるのか。そういったことに対する感覚をしっかりと磨いてほしい。

　実際に自分の預かっている生徒の実態から出発して、生徒のための教育をしていってほしいと切に願います。

山下◆　ありがとうございました。

（二〇一四年九月二九日於大修館書店）

戦後国語教育のあゆみ
――「言語活動」をキーワードに

山下（やました）　直（なおし）
文教大学准教授

平成20年告示[1]の学習指導要領では、「言語活動の充実」が「各教科を貫く重要な改善の視点」とされ、国語科においても言語活動を通して学習指導を行うことが一層明確にされた。戦後およそ七〇年、国語教育はどのような課題を抱え、どのような目標を掲げて推移してきたのだろうか。戦後の学習指導要領の変遷や各時代の社会情勢を振り返りながら、「言語活動」をキーワードにして、これまでの国語教育のあゆみを見つめ直してみたい。

■戦後教育の出発

1 昭和22年（試案）――戦後国語科教育の出発点

昭和22年に教育基本法と学校教育法が制定され、戦後の民主教育がスタート。これに伴い、教育課程の基準として、初めての学習指導要領が「試案」という形で示された。

国語科目　国語[2]、漢文

言語活動　国語科編の「第一章まえがき　第二節国語科学習指導の目標」には「一　かっぱつな言語活動をすることによって、社会生活を円滑にしようとする要求と能力とを発達させること」とあり、言語活動と国語科学習指導との関わりが説かれている。

2 昭和26年（試案）改訂――経験主義・単元学習

昭和22年版は必要に迫られて戦後ごく短期間の間に作成されたものだったため、四年後に早くも改訂が行われ、これも「試案」の形で示された。全教科を通じ、戦後の新教育の潮流となっていた経験主義や単元学習を重視するものだった。

国語科目　国語（甲）、国語（乙）、漢文

言語活動　小学校版の「まえがき　第三節　国語科の学習指導の一般目標は何か」にも次のように言語活動との関わりが説かれている。

国語学習指導の目標を考える場合には、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの四つの言語活動が、社会生活をしていく上に、どれだけ必要であるか、また、それらは、人間の成長発達にとってどんな意義をもつものであるかということをよく考えた上で、国語学習指導の目標をかんがえていかなくてはならない。

また、このほかに「言語経験」という語が見られることにも注目したい。昭和22・26年版では国語科学習指導の改善のために、「知識を一方的に教える指導からの脱却」「生活と密接につながる経験の重視」を教師に浸透させることが急務であったと思われる。これは非常に大きな変革であり、「言語活動」「言語経験」という二つの語を用いることで、知識を教えることからの脱却として「活動」させることを説きつつ、生活と密接につながる「経験」の重要性を説いたのであろう。当時の「言語活動」・「言語経験」という用語には、「活動」・「経験」という側面に主に重点が置かれていたと考えられる。

●戦後の社会・教育のあゆみ
（▽は主な世相・流行語など）

一九四五	昭和20		終戦
一九四六	21		極東国際軍事裁判開廷 「墨ぬり教科書」で日本史の授業が再開 憲法公布 当用漢字表、現代かなづかい告示
一九四七	22		教育基本法、学校教育法施行 **1 指導要領（試案）**
一九四八	23		新制高校発足 ソ連、ベルリンを封鎖 極東国際軍事裁判判決 ▽アプレゲール、冷戦
一九四九	24		下山事件・三鷹事件・松川事件
一九五〇	25		朝鮮戦争（～53） ▽特需景気
一九五一	26		**2 指導要領（試案）改訂** マッカーサー解任 サンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約調印
一九五二	27		メーデー事件

＊1　改訂年は、原則として小学校の学習指導要領が告示された年。
＊2　□は必修科目、⬚は選択必修科目。

教科書ピックアップ

大修館が戦後最初に刊行した教科書『高等漢文』。当時の漢文の存在感の大きさがうかがえる。

■経済も学習内容も「高度成長」

3 昭和33年改訂――学習の系統性・基礎学力の重視

朝鮮戦争特需による景気回復や本格的な経済復興を経て、一九五五年頃から日本は高度経済成長の時代に入っていく。学習指導要領は時代の要請を受けて改訂され、文部省告示として公示された。基礎学力の充実や科学技術教育の振興をうたい、国語や理数教科の授業時数が増えた。

国語科目　現代国語、古典甲、古典乙Ⅰ、古典乙Ⅱ

言語活動　一般には昭和22・26年の試案が経験主義に基づくのに対して、昭和33年告示の学習指導要領は系統主義に基づくと捉えられている。だが、ここでは「内容」の⑵に「活動を通して」指導することが明記されている点に注目したい。具体的に掲げられている活動を見ても昭和22・26年版とそれほど大きな違いがあるようにも思えない。つまり、活動を通して学習指導を行うという考え方は、基本的に継承されていると考えられる。系統主義への転換とそれに伴う「能力」の重視という側面があることは否定できないが、「言語活動」という視点からは昭和22・26年版との連続性を捉えることができると言ってよいだろう。

4 昭和43年改訂――現代化カリキュラム

めざましい経済発展や科学技術の向上などに対応して、教育内容の一層の向上を図るため、「現代化カリキュラム」と呼ばれる過密な学習指導要領に改訂された。学習内容の増加、高度化がピークを迎え、「詰め込み教育」「新幹線授業」などと批判され、知識の伝達に偏る傾向が指摘されるようになった。

国語科目　現代国語、古典Ⅰ甲、古典Ⅰ乙、古典Ⅱ

言語活動　昭和33年版を引き継ぎ、「活動を通して」の文言が見られる。特に小学校学習指導要領では「言語活動を通して」という表現になっており「言語活動」の語が用いられている。ここにも「言語活動」という点においては昭和22・26年版との連続性を捉えることができる。

■「知識」偏重からの転換

5 昭和52年改訂――知・徳・体の調和

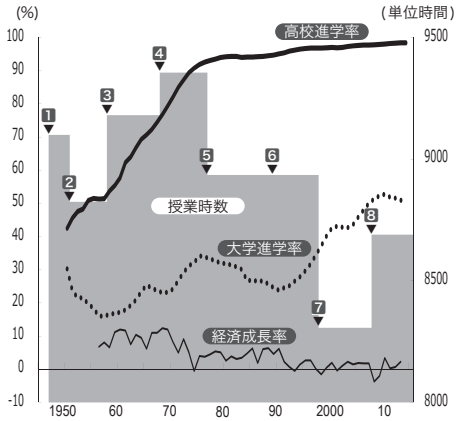
日本経済が高度成長から安定成長に移った一九七〇年代半ばには高校進学率が90％を超え、大学進学率も頭打ちとなる。学校教育が充実する一方、従来の「詰め込み教育」への批判もあった。改訂では児童生徒の「人間性」「個性」「ゆとり」を重視し、教育内容を精選するなど知・徳・体の調和のとれた発達を図った。

国語科目　国語Ⅰ、国語Ⅱ、国語表現、現代文、古典

言語活動　小学校のみであるが、「適切な言語活動を選び」の文言が見られる。「言語活動」の語が見られるのは小学校のこの一か所のみとなっている。

一九五五	30	テレビ放送開始
		保守合同、55年体制始まる
一九五六	31	『経済白書』、「もはや戦後ではない」と宣言
		全国学力テスト始まる
		ソ連が世界初の人工衛星打上に成功
一九五七	32	
一九五八	33	**3 指導要領改訂**
		東京タワー完成
		日米安保条約改定
一九六〇	35	▽所得倍増計画
一九六二	37	キューバ危機
一九六四	39	東海道新幹線開業
		東京オリンピック
一九六五	40	ベトナム戦争激化（～75）
一九六六	41	全国学力テスト廃止
一九六八	43	**4 指導要領改訂**
		川端康成ノーベル文学賞受賞
		GNP、米国に次ぎ世界第二位に
		学生運動激化（～70）
一九六九	44	米国の宇宙船アポロ11号、人類初の月面着陸に成功
一九七〇	45	大阪万博
一九七二	47	沖縄施政権返還
		日中国交正常化
一九七三	48	▽列島改造論
		石油危機
一九七五	50	『経済白書』、「高度成長から安定成長へ」を強調
一九七六	51	ロッキード事件
一九七七	52	**5 指導要領改訂**
一九七八	53	日中平和友好条約
一九七九	54	共通一次試験始まる
		第二次石油危機

データピックアップ



約20年にわたる日本経済の高度成長期は、学習内容の“高度成長期”でもあった。高校がほぼ全入になり、経済も安定成長に入った70年代半ば以降は、「ゆとり」の時代が約30年続いた。この先、学習指導要領はどう変わっていくのだろうか。

＊1 2…は本稿の小見出し番号に対応。「授業時数」は、学校教育法施行規則に示された小・中学校の単位時間数を示した。

6 平成元年改訂――生涯学習・個性の重視

受験競争の過熱化はなかなか収まらず、一方で校内暴力やいじめなどの問題も顕在化。改訂では臨時教育審議会が提言した「個性重視の原則」などをふまえ、筆記試験で測れる知識だけでなく、自ら学ぶ意欲や主体的な学習といった新しい学力観を打ち出した。

国語科目　国語Ⅰ、国語Ⅱ、国語表現、現代文、現代語、古典Ⅰ、古典Ⅱ、古典講読

言語活動　昭和52年版と同じ。戦後の国語科学習指導要領は、経験主義から系統主義に移行しながらも、言語活動を通して学習指導を行うという考え方は一貫して継承されているとはいえ、昭和22・26年版に比べると徐々にその扱いが小さくなってきている。

7 平成10年改訂――「生きる力」の育成

「生きる力」を育むという視点から学習内容の厳選、授業時数の削減が行われた。その上で「総合的な学習の時間」の創設、中学校における選択教科の時数増加が図られた。学校週五日制の完全実施。

国語科目　国語表現Ⅰ、国語表現Ⅱ、国語総合、現代文、古典、古典講読

言語活動　再び言語活動を大きく取り上げた。小・中・高ともに「内容の取扱い」に、言語活動を通して各領域の指導を行うことを明示するとともに、具体的な活動例も示している。背景に「生きる力」の育成があることは言うまでもないが、併せて、国語科の学習指導は一貫して言語活動を通した学習者の主体的な取り組みを前提としてきていることを改めて明確にしたと捉えることができる。

■新しい時代へ

8 平成20年改訂――思考力・判断力・表現力の育成

平成10年版と同様「生きる力」の育成を理念とする。思考力・判断力・表現力等の育成を図るため各教科における言語活動の充実が改善事項の第一と位置付けられた。二〇〇六年には六〇年ぶりに教育基本法の改正が行われた。

国語科目　国語総合、国語表現、現代文A、現代文B、古典A、古典B

言語活動　平成10年版を継承するとともに、「言語活動を通して」指導することが「内容」の(2)に示され、言語活動の充実が一層徹底されることとなった。忘れてはならないことは、平成20年版においては、国語科だけでなくすべての教科で「言語活動の充実」が図られているということである。このように、平成20年版の学習指導要領における「言語活動」は、国語科の学習指導だけでなくすべての教科において言語の能力を育成することを目指している点で、「言語活動」の「言語」の部分に重要な意味が含まれていることを認識しておく必要がある。

したがって、これからの国語科学習指導においても、思考力・判断力・表現力の育成という観点からどのような言語の能力を育成すべきかという意識を一層明確に持ちながら、学習者の主体的な取り組みを中心に据えた学習指導を模索していくことが求められる。

一九八〇	昭和55	イラン・イラク戦争
一九八四	59	グリコ・森永事件
一九八五	60	つくば科学万国博覧会 日航ジャンボ機墜落 プラザ合意 ▽団塊ジュニア
一九八六	61	チャレンジャー打上失敗 チェルノブイリ原発事故 ▽バブル景気（～89）
一九八七	62	『サラダ記念日』がベストセラーに
一九八八	63	大韓航空機爆破事件 青函トンネル開通 瀬戸大橋開通
一九八九	平成元	リクルート事件 平成改元 **6 指導要領改訂**
一九九〇	2	消費税導入 天安門事件 センター試験始まる
一九九一	3	ドイツ統一 湾岸戦争
一九九三	5	55年体制終焉
一九九四	6	大江健三郎ノーベル文学賞受賞 ▽価格破壊、就職氷河期、引きこもり
一九九五	7	阪神・淡路大震災 地下鉄サリン事件
一九九八	10	長野オリンピック **7 指導要領改訂**
一九九九	11	▽学級崩壊
二〇〇〇	12	携帯電話普及率、50％を超える ▽IT革命、出会い系サイト、パラサイト・シングル
二〇〇一	13	米同時多発テロ ▽聖域なき構造改革
二〇〇二	14	▽日本語本ブーム
二〇〇三	15	イラク戦争 ▽オンリーワン、年収三〇〇万円
二〇〇四	16	▽ブログ、自己責任
二〇〇五	17	愛知万博
二〇〇六	18	教育基本法施行 ▽格差社会
二〇〇七	19	全国学力テスト再開 ▽KY、ネットカフェ難民
二〇〇八	20	**8 指導要領改訂** リーマン・ショック
二〇〇九	21	▽ツイッター、KY式日本語
二〇一一	23	東日本大震災

アンケート

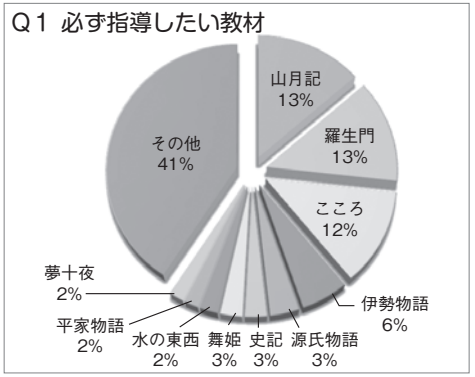
創刊100号記念

国語の先生100人に聞きました
若手国語教師の「いま」

これからの国語教育を担う若手の先生方に、教科書教材や言語活動、古典指導についてなど、国語教育にまつわる日頃のお考えを全11問のアンケート形式でお伺いしました。

教材について

Q1～Q4



【Q1】まずは、教科書掲載の教材で必ず指導したい教材について、教科書会社・ジャンルを問わず3つ挙げていただきました。

ベスト10は以下のとおりです。

①山月記（中島敦）31票
②羅生門（芥川龍之介）30票
③こころ（夏目漱石）28票
④伊勢物語 13票
⑤源氏物語 8票
⑥史記 6票
⑥舞姫（森鷗外）6票
⑧水の東西（山崎正和）5票
⑧平家物語 5票
⑩夢十夜（夏目漱石）4票

「山月記」「羅生門」「こころ」という近代文学の名作が、ほぼ同数で上位3位を占める結果となりました。

評論では票が割れたものの「水の東西」が5票獲得で8位にランクイン。「「である」ことと「する」こと」（丸山真男）が3票獲得で11位に続きます。評論は**「教材より著者で選んでいます」**（大阪・男性）というコメントのとおり、内田樹、福岡伸一、岩井克人、村上陽一郎、鷲田清一などの筆者名が多く挙げられました。

古典も物語を中心に4作品がランクイン。4位の『伊勢物語』では**「「あづさ弓」と「芥川」を必ずやりたい。生徒のくいつきが他の話とは段違いです」**（東京・瑞穂農芸・酒井元樹先生）など、具体的な章段も挙げられています。

なお【Q2】で編集部が挙げた現代文の定番といわれる教材は、8教材中5教材がベスト10入り。若手の先生方にとっても、まずは定番教材をしっかり押さえておきたいという傾向は変わらないようです。

Q1　国語教科書教材で、必ず指導したい教材を3つお答えください。
Q2　次の各教材についてお答えください。
①羅生門　②こころ　③山月記　④舞姫　⑤水の東西　⑥ミロのヴィーナス
⑦「である」ことと「する」こと　⑧無常ということ

【Q2】現代文の定番教材といわれる8教材について、授業で扱いたいかどうかを、次の5つの選択肢から選んでお答えいただきました。

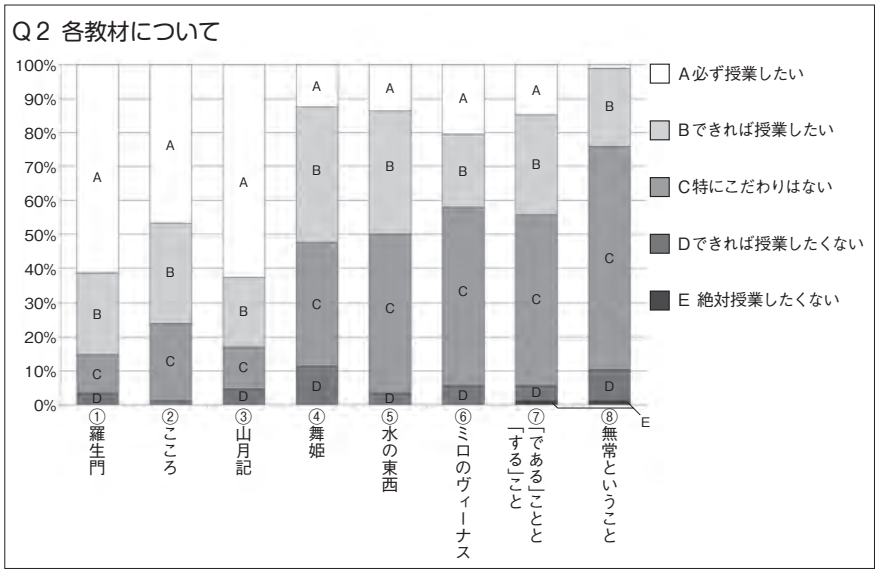
A　必ず授業したい
B　できれば授業したい
C　特にこだわりはない
D　できれば授業したくない
E　絶対授業したくない

まず小説について、A「必ず授業したい」の割合は、①「羅生門」54票、③「山月記」55票でともに60%を超えていますが、②「こころ」は41票で46%、④「舞姫」では11票でわずか12%。漱石・鷗外の明暗を分ける結果となりました。ただし④「舞姫」は、B「できれば授業したい」が35票40%と8教材中最も高く、理想と現実のギャップに悩む先生の姿が浮かびます。

評論では、AB合わせて「授業したい」割合が高かった順に⑤「水の東西」、⑦「「である」ことと「する」こと」、⑥「ミロのヴィーナス」（清岡卓行）で、【Q1】の結果とも一致しています。

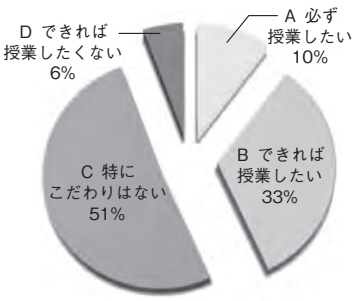
	①羅生門	②こころ	③山月記	④舞姫	⑤水の東西	⑥ミロのヴィーナス	⑦「である」ことと「する」こと	⑧無常ということ
A	54	41	55	11	12	18	13	1
B	21	26	18	35	32	19	26	20
C	10	20	11	32	41	46	44	57
D	3	1	4	10	3	5	4	8
E	0	0	0	0	0	0	1	1

数字は得票数



Q３　現在活躍中の新しい作家の小説作品を教材とすることについてお答えください。
Q４　授業で扱いたい評論のテーマは何ですか。

Q３ 新しい作家の小説作品



【Q３】現在活躍中の新しい作家の小説作品について、授業で扱いたいかどうかを【Q２】と同じ選択肢から選んでお答えいただきました。

A「必ず授業したい」B「できれば授業したい」を合わせて43％で、【Q２】の結果に比しても、新しい小説教材を積極的に授業で扱いたい先生が多いことがわかります。

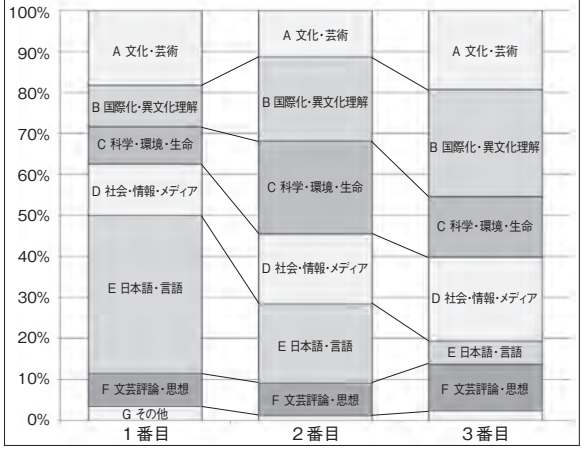
具体的な作者・作品名では、得票数順に①村上春樹（「とんがり焼きの盛衰」など９票）、②重松清（「エイジ」など６票）、③三浦しをん（３票）、④恩田陸、津村記久子（ともに２票）とさまざまな回答でした。**「中身がしっかりしていれば誰でも」**（北海道・常呂・川尻佳美先生）**「教科書はまだまだ女性作家の収載が少ないと思う」**（三重・桑名・佐藤諒先生）というコメントもいただきました。

【Q４】授業で扱いたい評論のテーマについて、次の選択肢から１番目から３番目まで選んでお答えいただきました。

A　文化・芸術
B　国際化・異文化理解
C　科学・環境・生命
D　社会・情報・メディア
E　日本語・言語
F　文芸評論・思想

１番目に扱いたいテーマでは①E「日本語・言語」34票、②A「文化・芸術」16票、③D「社会・情報・メディア」11票。２番目に扱いたいテーマでは①C「科学・環境・生命」20票、②B「国際化・異文化理解」18票、③E「日本語・言語」17票。３番目に扱いたいテーマでは①B「国際化・異文化理解」23票、②D「社会・情報・メディア」18票、③A「文化・芸術」17票。全体ではE→B→D→A→C→Fの順で、日本語への関心の高さがうかがわれる結果となりました。

Q４ 扱いたい評論のテーマ



Q５　授業に「話すこと・聞くこと」の活動を取り入れていますか。
Q６　授業に「書くこと」の活動を取り入れていますか。
Q７　授業で実践したい言語活動は何ですか。

言語活動について

Q５～Q７

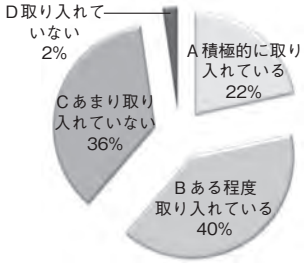
【Q５】「話すこと・聞くこと」【Q６】「書くこと」の活動を授業に取り入れているかを選択肢でお伺いしました。

A「積極的に取り入れている」B「ある程度取り入れている」を合わせた割合は「話すこと・聞くこと」で62％、「書くこと」は83％と高く、その内容には教材に関するグループ討議や、感想文・意見文などが多く挙がりました。

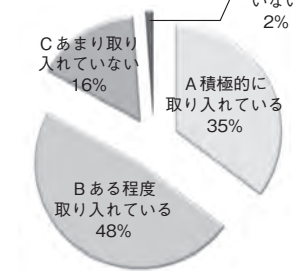
取り入れない理由としては、【Q５】【Q６】とも時間的余裕のなさを挙げる先生が最も多く、**「テストに取り入れにくい」**（埼玉・蓮田松韻・小松航先生）**「能力的に難しい気がして、尻ごみしてしまう」**（栃木・女性）など不安の声も挙がりました。

【Q７】では実践したい活動について、10項目から選択（複数回答可）でお答えいただき、下のグラフのような結果となっています。

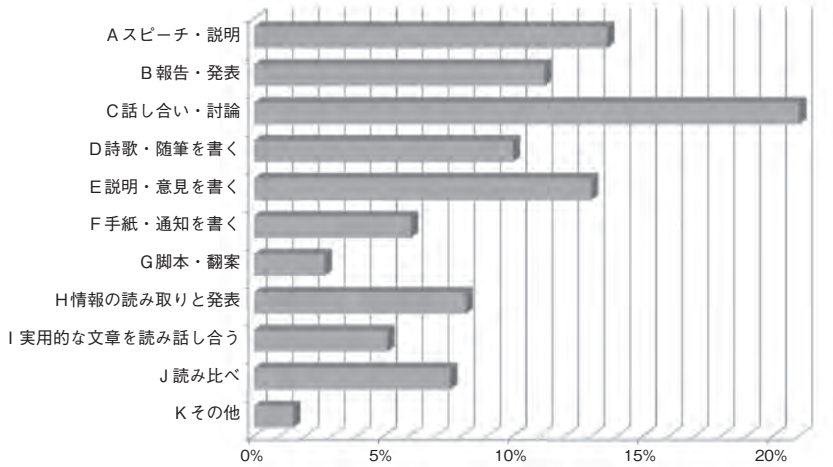
Q５「話すこと・聞くこと」の活動



Q６「書くこと」の活動



Q７ 実践したい言語活動



Q８　授業で扱いたい古文教材は何ですか。
Q９　授業で扱いたい漢文教材は何ですか。
Q10　古典指導で重視することは何ですか。

古典について

Q８～Q10

【Q８】【Q９】古典教材について、授業で扱いたいジャンルを1番目から3番目まで選択肢でお伺いしました。

古文では①A「物語」②D「説話」③B「随筆」の順に得票数が多く、漢文では①B「史伝」②D「故事成語」③A「思想」の順となりました。

韻文は、古文・漢文とも3番目に扱いたい割合が高いのが特徴的です。

Q８ 扱いたい古文教材

教材	１番目	２番目	３番目
A 物語	52%	20%	15%
B 随筆	11%	25%	10%
C 日記	1%	10%	11%
D 説話	23%	15%	18%
E 和歌・俳諧	0%	10%	20%
F 軍記	3%	11%	9%
G 評論	2%	3%	2%
H 能・狂言	0%	2%	2%
I 古典文法	3%	1%	6%
J＊	1%	0%	3%
K その他	2%	1%	2%

＊Ｊは、古典に関連する近代以降の文章

Q９ 扱いたい漢文教材

教材	１番目	２番目	３番目
A 思想	16%	24%	20%
B 史伝	43%	17%	16%
C 漢詩	8%	13%	20%
D 故事成語	25%	28%	15%
E 格言	3%	8%	10%
F 小説	0%	6%	10%
G 訓読のきまり	3%	3%	3%
H＊	0%	0%	3%
I その他	1%	1%	1%

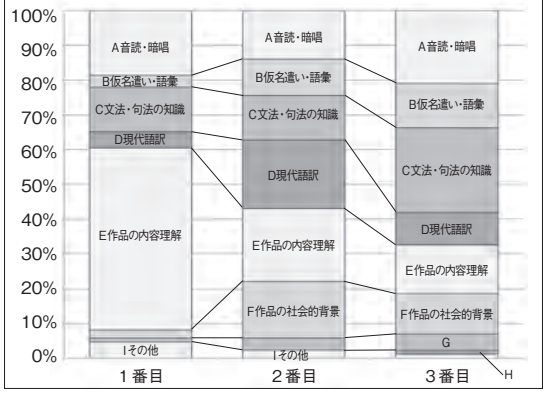
＊Ｈは、古典に関連する近代以降の文章

【Q10】古典指導で重視することを8項目から選択（複数回答可）でお答えいただきました。

全体を通じて①E「作品の内容理解」が75票と最も高く、②A「音読・暗唱」が46票、③C「文法・句法の知識」43票、④D「現代語訳」29票、⑤F「作品の社会的背景」26票、⑥B「仮名遣い・語彙」23票と続きます。

C「文法・句法の知識」は3番目、D「現代語訳」は2番目に挙げられる割合が高いのがわかります。

Q10 古典指導で重視すること

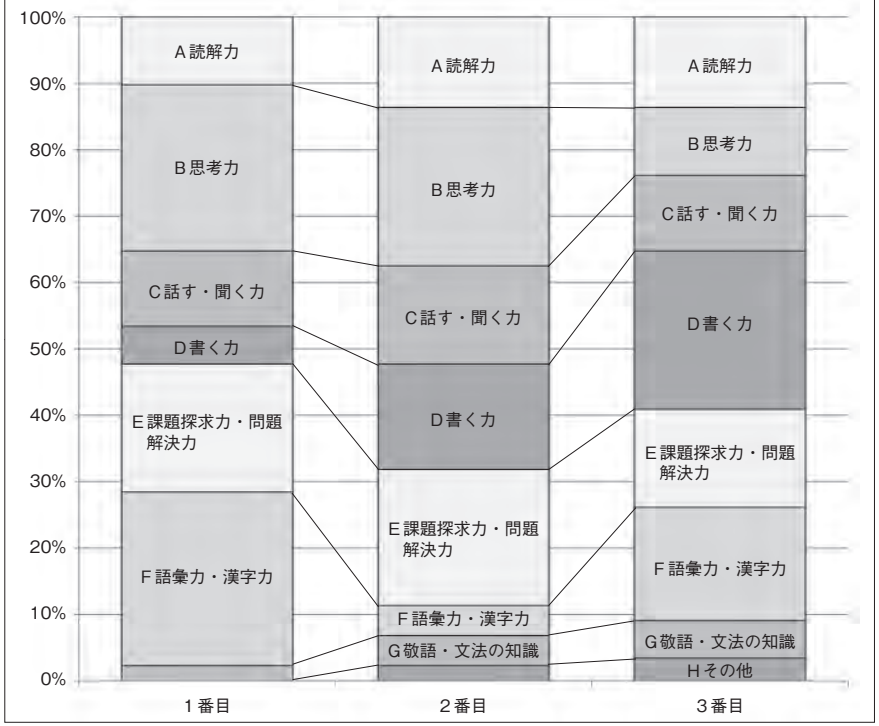


＊Ｇは、作品の文学史上の価値
＊Ｈは、辞書の使い方

その他には「古典作品を通して、自分の思想や生き方の糧になる不易流行をさぐること」（広島なぎさ・梅田悠紀子先生）や、「その作品が現代にどう生きているか。現代とのつながり」（岐阜・男性）「古典への興味・関心」（群馬・男性）などのご意見をいただきました。

Q11　いまの高校生の国語力について、課題があるとお考えの要素は何ですか。

Q11 高校生の国語力についての課題



まとめ

Q11

【Q11】高校生の国語力について、課題があるとお考えの要素を1番目から3番目まで7項目の選択肢でお伺いしました。

全体では①B「思考力」52票、②E「課題探求力・問題解決力」48票、③F「語彙力・漢字力」42票、④D「書く力」40票の順に得票数が多く、以下⑤C「話す・聞く力」、⑥A「読解力」ともに33票で続いています。

その他のご意見としては、「中学校で文法が身についていないこと」（山口・田部・佐々木翔太郎先生）、「生活と関連している意識・生活へと活用する意識」（北海道・旭川東・大村勅夫先生）、「人間関係をつくる力。コミュニケーション」（大阪・男性）「文章を映像化して、イメージする力」（千葉・男性）。

いずれも国語科が中心となって取り組みたい課題が挙がっています。

アンケート結果の詳細は、「WEB国語教室」でも公開予定です。ご協力いただきました先生方には、謹んで御礼申し上げます。

国際バカロレアから考える国語教育の未来像

岩崎（いわさき） 久美子（くみこ）
国立教育政策研究所総括研究官

1　国際バカロレア（IB）とは何か

国際バカロレア（以下「IB」）と呼ばれる教育プログラムが、私立高校のみならず、地方自治体の判断により公立高校に導入される動きがある。

IBとは、スイス民法典に基づく財団法人国際バカロレア機構が提供する教育プログラムであり、一九六八年に発足して以後、国際学校を中心に普及したものである。国際学校など限られた学校で導入されていたIBが、日本の教育現場で近年注目されるようになったのは、政府が中心となり、グローバル人材育成を掲げ、日本の高校へのIB導入を推進しているからである[1]。

その理由としては、第一に、IBは多様な人種や民族が共存してきた欧米諸国での思考、態度、コミュニケーションを重視するグローバル化に対応したカリキュラムであること、第二に、IBが生徒の主体的学びや、学び方の技能を習得することを重視し、応用力、活用力、問題解決能力など、これからの社会で必要とされる力をつける知識活用型カリキュラムであることによる。

後者は、現在の学習指導要領の中心的な考え方である「生きる力」を具現化する内容や、生涯にわたって学習し得る能力を付与するカリキュラムと同義であり、すでに日本の国語教育で一部は実践され、成果を挙げてきたものである。しかし、IBが優れているのは、国籍や文化的背景が異なった教師であっても実践可能なように、カリキュラム内容、授業の構造、そして評価方法が細部にわたり明示化され、体系化されたパッケージとして提供されているところにある。

IBは、初等教育課程（PYP）、中等教育課程（MYP）、大学入学資格課程（以下「DP」）と、小学校から高校に至る体系的なプログラムとして発展してきている。ここでは、その中で日本の高校の国語教育に相応する、大学入学前の二年間の課程で、大学入学資格を提供するDPの言語A「言語と文学」の内容を紹介し、そこからわが国の国語教育への示唆を考えてみたい。

2　IBにおける「言語と文学」科目

IBのDPプログラムは、精緻に構造化されたカリキュラムである。生徒は、自分の興味・関心や大学の進路を考慮し、「言語と文学」、「言語の習得」の二つのグループから現代言語を2言語、「個人と社会」から人文科学か社会科学科目1科目、「理科」から1科目、「数学」から1科目、そして、「芸術」から1科目、合計6科目を選択する。加えて、各科目について、通常3科目（最大4科目）を上級レベル（HL）、それ以外を標準レベル（SL）とする選択を行う。上級レベル（HL）の内容は、大学の入門コースと同レベルの教育内容と評されており、米国の大学ではIBの科目取得をもって単位認定を行う場合もある。

この他、学習の中核を形づくり、IBの6教科全体を通じて学際的に取り組むものとして、(1)批判的思考訓練である「知の理論」（TOK）、(2)芸術、身体的活動、社会奉仕などの「創造性・活動・奉仕」（CAS）、(3)個人研究の成果である「課題論文」（EE）八〇〇〇字（日本語の場合）が併せて課される。

以上が、IB・DPカリキュラムの全体像である。

次に教科の具体的内容について、日本の高校の国語教育に相当する「言語と文学」の「言語A：文学」上級レベル（HL）を例に見てみよう。

「言語A：文学」は、生徒の第一言語（母国語が多い）に基づき、IBで作成した「指定作家リスト」から教師が作家の作品を選択し、それに沿って学習する。「言語A：文学」は、四つのパートからなる。

パート1は世界文学で、翻訳作品リストから異なる作家の三つの作品、パート2は精読学習で、指定作家リストから異なるジャンルの三つの作品（そのうち一つは詩）、パート3はジャンル別課題で、指定作家リストの中から選択した同じジャンルの異なる作家による四つの作品、パート4は自由選択で、三つの作品の学習である。二年間の総授業時間数は240時間（パート1～3はそれぞれ65時間、パート4は45時間）であり、生徒は二年間で文学作品を13冊

読破する。[2]

たとえば、日本語による「言語A：文学」上級レベル（HL）の例として、ある国際学校では、パート1が『異邦人』（カミュ）、『変身』（カフカ）、『オディプス王』（ソポクレス）、パート2は『おくのほそ道』（松尾芭蕉）、『萩原朔太郎詩集』（萩原朔太郎）、『友達』（安部公房）、パート3は『砂の女』（安部公房）、『個人的な体験』（大江健三郎）、『金閣寺』（三島由紀夫）、『雪国』（川端康成）、パート4はフランス文学のジャンルを選択し、『赤と黒』（スタンダール）、『テレーズ・デスケルウ』（モーリアック）、『迷路のなかで』（ロブ・グリエ）を指定している。

生徒は、作品を精読し、試験問題二回（論評、一つのジャンルから二つ以上の作品についての小論文）、記述課題（一つの文学作品を探究し記述）、個人口述コメンタリー（ディスカッションを含む）、個人口述プレゼンテーションの準備、演習を行う。これらの試験や課題に対し、「知識と理解」、「分析、統合および評価」そして、「適切な言葉遣いおよびプレゼンテーションスキルの選択と使用」の三つの観点から、評価がなされる。

IBを教える教師の言葉によれば、日本の国語教育は、「幕の内弁当的にいろいろな種類のおかずを少しずつ並べた感じ」であるが、IBでは、「一品を存分にお腹いっぱい味わうことができる」（文学作品を一冊まるごと読む）。生徒は、文学作品を読み込み、その解釈や理解、小論文執筆、ディスカッション、プレゼンテーションといった一連の過程で、自分の経験、感性、感情を、自ら、そして他者とのやりとりから引き出し、深く思考するようになる。他方、教師は、生徒の小論文の添削やコメントなどのフィードバックを行うための時間が必要とされ、また、生徒に適切な助言をするために、教材研究や授業に独自の工夫をするなど、常に自己研鑽につとめなければならない。しかし、文学作品の楽しさを生徒とともに共有し、生徒から触発され、教師自身も生徒とともに成長していることを感じるという。[3]

OECD（経済協力開発機構）が実証研究に基づき掲げた効果的学習に関わる七つの原理の一つは、「感情が学習にとって重要」ということである。[4] 教育効果を上げるには、動機づけ、達成感情、楽しさなど、生徒の感情に働きかける学習の工夫が必要である。IBにあっては、授業が楽しいと多くの生徒と教師は評し、人間的対峙から、生徒と教師が共に成長する学習共同を形成している。その教育効果は従来の一斉授業と比較するに値しよう。

3　IBの教育効果と日本の国語教育の未来像

ここであらためて、筆者が考えるIBの「言語A：文学」の教育効果をまとめれば、第一に、文学作品の解釈、小論文の執筆、仲間とのディスカッション、プレゼンテーションという一連の流れは、生涯学習の基礎となる体系だった学習技能の獲得につながる。第二に、文学作品を通じ多感な思春期の人生の指針を得る。長きにわたり「言語と文学」を教えてきたIB日本語教師は、「文学の授業は、人生を学ぶことである。一冊の文学作品には主人公以外にも多くの登場人物が存在する。その人たちの人生の一時期、または人生すべてを学ぶこととなる。（中略）多くの人々と作品上で出会うことにより、生徒たちは自己の人生を考えるようになる」と述べている。[5] 第三に、日本文学を通じ、言語や思考方法など、日本人としてのアイデンティティを確認し、日本文化の素養を得ることができる。

IBが涵養する生徒の主体性や自ら試みる深い思考、教師と生徒との相互作用によるIBの教育効果や利点を咀嚼することで、国語教育は、教科の狭い枠を超えて、生徒の人生や、生涯にわたる学習能力の基礎となる内容へと、一層発展する可能性があろう。その上で、生徒自らの人生を考えさせる豊かな時間を保障していくことも、これからの国語教育に望まれるところである。

IB教育の示唆を経て国語教育が一層充実することは、多感で悩み深き高校時代を過ごす者への福音である。これからの国語教育にあっては、学習技能の獲得や自分自身の生き方の模索など、広い意味での人生の意義深い学習を意図した内容が提供されることを、予見とともに期待したい。

1　「グローバル人材育成推進会議」の「グローバル人材育成戦略」（二〇一二年六月）では、「高校卒業時にIB資格を取得可能な、又はそれに準じた教育を行う学校を五年以内に二〇〇校程度へ増加させる」としている。
2　IBO, *Language A: Literature guide* を参照。
3　橋本八重子、金藤ふゆ子、岩崎久美子「IBを教える日本人教師に関する調査」（二〇一四年六－七月実施）より。
4　OECD/CERI, *Nature of Learning*, 2010（立田 慶裕ほか訳『学習の本質　研究の活用から実践へ』明石書店、二〇一三）
5　石村清則「日本語A1の実践とキャリア意識」（相良憲昭・岩崎久美子編著『国際バカロレア――世界が認める卓越した教育プログラム』明石書店、二〇〇七）一五五－一六頁.

メディア・リテラシーからの二つのお願い

水越（みずこし） 伸（しん）
東京大学情報学環教授

■豊かさのなかの貧困

ソーシャル・メディアやモバイル・メディアの急速な普及に伴って、人とつながることがますます容易になり、情報があふれかえる豊かさのなか、ふと気がついてみると私たちは、戦後ほとんど体験してこなかったような言論とコミュニケーションの危機に陥ってしまっている。

たとえばヘイトスピーチとテロリズム。いずれも古くから存在していたが、今日ではメディアを介した社会的な暴力となった。それらが学校現場から遠い出来事だとしても、たとえば「Lineはずし」によるいじめ、Twitterでの炎上、リベンジポルノはけっして対岸の火事とはいえないだろう。教師はどうあれ、高校生のリアルはそのただ中にある。いずれもメディアを介したコミュニケーションとして、共通した問題を抱えているのである。

情報技術とメディアの発達のなかで、誰もが息苦しさを感じ、たえず何者かに見られているような気味の悪さを感じ、日がな一日スマートフォンの画面ばかりを見続けている自分への情けなさを感じる。21世紀前半の情報社会は、世界的に、おしなべてこんな貧しいありさまになっている。

■21世紀のメディア・リテラシー

メディア・リテラシーとはそもそも英米圏において、文字の読み書きの延長線上にメディアの読み書きを位置づけて理解しようとした、リテラシー（識字）の比喩的表現である。リテラシーの起源は文字の歴史とともに古いが、メディア・リテラシーは第二次世界大戦のころからだ。すなわち、ラジオ、映画、ポスターといったメディアが戦争宣伝のために活用され、それらが人々の心を一様に染あげていくことに抗うため、メディアを注意深く見て批判的に考える術や素養を、おもに青少年に教育していく営みとして現れたのだった。戦後は、アメリカから世界に向けて輸出された映画、コミック、テレビ番組などの大衆的メディアを鵜呑みにせず、批判的に読み解こうという、文化保護主義的な観点が際立った。

一九八〇年代に入る頃から、大衆文化を高所大所から見下ろして批判するのではなく、それに内在してとらえなおしていこうというカルチュラル・スタディーズの思潮が文学、歴史学、社会学など人文社会系諸領域で横断的に立ち上がり、メディア・リテラシーも大衆文化とともに生きる私たちがメディアと意識的に関わっていくための営みを意味するように発展してきた。そのターゲットは、テレビ、雑誌、マンガ、映画などのマスメディアだった。

一九九〇年代から普及しはじめたインターネットと携帯電話、二〇〇〇年代のソーシャル・メディアやモバイル・メディアがもたらしたのは、一対多のかたちで社会に影響を与えるマスメディアとは異なる、多対多の錯綜したコミュニケーション・ネットワークだった。このようなメディアの質的変貌を前に、メディア・リテラシーはどのような対応すればよいのか。世界各地でさまざまな取り組みがなされてはいるものの、いまだにはっきりとしない。理論的、学問的に未成熟ということもあるが、冒頭にあげたようなメディア状況自体がもたらす技術的、政治的な困難によるところが大きい。

■文章作品を支えるメディアへの注目

私はそうしたなかで、新たな時代のメディア・リテラシーの見取り図を描こうと悪戦苦闘している一人である。この場を借りて、国語教育を担う方々に対して、二つのお願いをしておきたい。

第一に、作品だけではなくメディアに注目した学習の場を設けてほしい。

メディア・リテラシーの大きな理論的支柱はメディア論にある。メディア論とは、人々のコミュニケーションを媒（なかだち）するメディアのありように注目をする。コミュニケーションはコミュニケーションの中身そのものではなく、それがどのようなメディアによって媒介されているかによって規定されると考えるためだ。ここで文学作品の読解という行為を、広くコミュニケーションの一部ととらえてみよう。文学研究は普通、書かれた作品の中身と著者の精神的

なありようにアプローチしていく。メディア論は書かれた作品の中身ではなく、何に作品が書かれているかに注目をする。たとえば森鷗外の『高瀬舟』を、教科書で読むのか、新潮文庫で読むのか、初版復刻本で読むのか、Kindleで読むのか。『高瀬舟』を運び、それを介して私たちが読解する媒体のちがいが、その作品の理解や印象、読み手との関係性に大きな影響を与えると考えるのだ。「メディアはメッセージである」というマクルーハンの警句は、そのことを端的にあらわしていた。

スマートフォンで俳句を作り、Kindleで『高瀬舟』が読める現代社会のなかで、国語は教科書に載る作品（コンテンツ）の読解だけではなく、読書体験におけるメディアの意義について、すなわちメディア・リテラシーについて学ぶ場であってほしい。それは、情報があふれかえる社会のなかで、人々が紙とデジタル、実社会とオンラインのバランスが取れたメディアとの関わり方を学ぶ上で肝要だといえる。

■読解と創作のらせん的循環

第二に、読解と創作がらせん的に循環する場を生みだしてほしい。

これまでの国語教育が文章作品の読解に重きをおいてなされてきたのに対し、近年さまざまな局面で作文、表現、あるいは創作の重要性が指摘されてきているようである。歴史的にみれば、生活綴り方、作文教育の系譜が交錯しながら、今日的状況に流れ込んできていると見てもよいのかもしれない。しかし読解と創作という二つの営みが、十分に結びついたかたちでなされているかといえば、そうとはいえないのではないだろうか。

私たちは多くの場合、メディア・リテラシーを座学では教えはしない。ワークショップ形式で、参加者の自律的な覚醒と学びの場をしつらえる。ここで言うワークショップとは、二〇～三〇名程度の人がゲームのような一定のルールに従って（日常の決まりごとから解放されて）、共同してモノをつくったり、なにかを表現したりすることを通して、書物を読んで思弁的に理解したり、頭の中で観念操作したりするだけではえられない、深い学び、体感を促すような活動のことだ。ワークショップはもっと国語教育の現場に投入されてもよいのではないか。

重要なことは、文章作品の読解と創作のらせん的循環だ。たとえばまずは古典を読み解く。その知見を踏まえつつ、同じテーマで自分がエッセイを書いてみる。彼我のあいだには時代の違いなどがあり、同じ文脈や立場で書くことにはならないが、しかし同じテーマに取り組むことで、はじめて古典の書き手は自分に内在化してくる。書く過程で書き手が自分に語りかけてくれるのだ。そして書かれた作品を発表し、仲間同士で講評する場を設ける。できれば筆者自らが声に出して読み、それをみんなで鑑賞し、話し合える場にするとよい。生徒はそこで文字というメディアで書かれた作品を声というメディアに変換して発表するという、新たな創作を体験する。同時に仲間はそれを「読み解き」ならぬ「聴き解く」機会を体験する。その「聴き解き」を経た批評に応えて、創作をさらにらせん的に高めていく。そのような読解と創作のらせん的循環は、新たな時代のメディア・リテラシーを基礎づけるだろう。

ここでいう創作は必ずしも原稿用紙にまとめられたエッセイや詩である必要はない。国語を支えるメディアを広くとらえるならば、たとえばTwitterやFacebookを素材にするのもおもしろい。ソーシャル・メディアで炎上が起こる大きな理由の一つは、そのメッセージが誰に届いているのかを想像できていない、パブリックな読者が想定できていないことにある。Twitterでの詩作やフェイスブック上の研究レポートがあることを思いだしてほしい。それらをよりよいもの、魅力的なモノにしていく際にも、読解と創作のらせん的循環は有効なはずだ。

現代情報社会の貧しさは、一朝一夕にはなくならない。ヘイトスピーチ、テロリズム、ネット上の誹謗中傷やいじめの根本には、優れた文学作品や随筆が象徴してきた知性的なるものを頭ごなしに否定する、反知性主義が横たわっている。それは根深く、国語教育もメディア・リテラシーもどこかでそれらと向き合っていかざるをえない。知性の根本には言葉があり、国語やリテラシーはそれについての教育活動だからである。

二つのお願いが国語教育の現場でどこまで現実的かはわからない。バランスが取れた提案がどうかも定かではない。しかしこうしたメディア・リテラシーからのお願いを包含するような国語教育が、時代のなかで求められていることはまちがいない。

1980 ～ 2014

国語教室

1～100号 特集一覧

『国語教室』100号を記念し、100号分の特集目次を一挙紹介。その折々の国語教育界のトピックが見えてきます。

▼一九八〇年
1号 日本語と国語教育をめぐって
2号 日本の短編小説をめぐって
3号 日本の詩
4号 国語表現
5号 評論教材の指導

▼一九八一年
6号 「国語Ⅰ」の編集をおえて
7号 理解と表現――関連指導の方法
8号 漢文教育によせて
9号 常用漢字
10号 国語教育

▼一九八二年
11号 国語科の新しい選択科目
12号 文学にみる青春像
13号 大学入試
14号 現代の高校生と国語科の授業

▼一九八三年
15号 「国語Ⅰ」をめぐって
16号 話し言葉教育を考える
17号 古典と古典教育を語る
18号 教材の条件

▼一九八四年
19号 古典入門期の指導
20号 国語の授業はどう変わったか
21号 漢字教育
22号 文法を考える

▼一九八五年
23号 音読のすすめ
24号 教材への招待
25号 文学教材にみる愛の表現
26号 短歌・俳句の指導

▼一九八六年
27号 新しい国語教師をめざして

1980 ゆとり 大学入試 古典教育 1990 情報化社会

1号(1980)
創刊号

「ゆとり」路線への転換を打ち出した指導要領の実施が二年後に迫っていた一九八〇年、『国語教室』創刊。創刊号の座談会では、学力低下への危惧や古典軽視への懸念が熱く語られていました。

八〇年代を通じて、「ゆとり」で特に縮小された古典教育のあり方や、過熱する大学入試について考える特集などが組まれています。

八〇年代後半のワープロ専用機に続き、九〇年代にはパソコン、インターネットが急速に普及。これらの機器を国語教育にどう活かせるか、試行錯誤する記事や特集がたびたび組まれました。

28号 この教材、ここがポイント
29号 古典の授業改善の視点

▼一九八七年
30号 新教材の周辺を語る
31号 国語教師のための資料集
32号 国語教育雑感

▼一九八八年
33号 新教材の周辺を語る
34号 新教材・授業のポイント
35号 情報化社会とこれからの国語教育

▼一九八九年
36号 選択「現代文」の教材と指導
37号 新学習指導要領改訂のポイント
38号 国語の授業活性化の工夫

▼一九九〇年
39号 この教材でこういう事を教えたい
40号 漢字の辞典
41号 古典芸能の魅力

▼一九九一年
42号 「国語Ⅰ・Ⅱ」教材の周辺
43号 国語教育の先人たち
44号 世界の国語教科書

▼一九九二年
45号 「大漢語林」(漢和辞典について)
46号 新カリキュラム編成への視点
47号 国語教育の現在――実践と研究

▼一九九三年
48号 新教科書への招待
49号 この教材でこんな授業を
50号 50号記念対談・座談会

▼一九九四年
51号 選択科目を生かす――新教科書への招待
52号 中学・高校を結ぶ視点
53号 今を読む視点――テーマ別ブックガイド

▼一九九五年
54号 「新現代文」――教材の魅力・指導のポイント
55号 授業研究のすすめ
56号 古典教育に声を

▼一九九六年
57号 教室で読む現代小説――指導のポイント
58号 安定教材をめぐって――羅生門・山月記・こころ・舞姫
59号 国語科の指導を見なおす

▼一九九七年
60号 改訂版「国語Ⅰ」「新国語Ⅰ」――新教材の魅力
61号 国語科とマルチメディア
62号 古語林

マルチメディア 2000 日本語ブーム 評価 PISA型読解力 2010 言語文化

62号(1997)
表紙フルカラー化

二〇〇〇年代に入ると、書籍やテレビで空前の日本語ブームが起こりました。折から刊行された小社『明鏡国語辞典』の紹介も兼ねて、言葉や辞典に関する特集が目立つようになります。

国語教育界では、PISAや評価が話題になりました。

95号(2012)
リニューアル

二〇一三年度からの新指導要領実施に合わせ、小誌も大幅リニューアル。これから、どんなキーワードが国語教育に登場してくるでしょうか。

▼一九九八年
63号　大修館の新教材10選
64号　詩と出会うために
65号　いま漢字をめぐって
▼一九九九年
66号　「新現代文　改訂版」のすすめ
67号　新学習指導要領をよむ
68号　カラーワイド新国語要覧〔増補第三版〕
▼二〇〇〇年
69号　大漢和辞典〔補巻〕／大修館新教材を使って
70号　教室を出よう――活動中心の授業実践集
71号　漢和辞典に親しむ
▼二〇〇一年
72号　教材を生かすヒント――テーマで読む大修館の現代文教材
73号　いま、古典へアクセス！
74号　古語辞典をフル活用！
▼二〇〇二年
75号　新刊「国語総合」「新編国語総合」
76号　「明鏡国語辞典」
▼二〇〇三年
77号　新刊「現代文」「古典」
78号　「明鏡国語辞典携帯版」刊行！

▼二〇〇四年
79号　大修館の新課程用国語教科書
▼二〇〇五年
80号　漢和辞典を授業に活かす
81号　大修館の評論教材で読解力を身につける
82号　これからの「評価」をどう考えるか
▼二〇〇六年
83号　「国語総合」改訂版刊行
84号　国語辞典を作る楽しさ
▼二〇〇七年
85号　改訂版「現代文」「古典」刊行
86号　ことわざ・成句・四字熟語
▼二〇〇八年
87号　「現代文」「古典」改訂版4点刊行
88号　〝PISA〟再入門
▼二〇〇九年
89号　現代文教材の〝いま〟と〝これから〟
90号　新学習指導要領をめぐって
▼二〇一〇年
91号　誕生！　新時代の〈国語総合〉教科書
92号　「明鏡国語辞典」「新漢語林」第二版刊行

▼二〇一一年
93号　教材研究と授業実践
94号　「聞き書き」指導が高校生を変える
▼二〇一二年
95号　新課程の「国語総合」ついに登場
96号　辞書を使おう、もっと使いこなそう！
▼二〇一三年
97号　時代を〈読む〉力
98号　「教養」としての言語文化
▼二〇一四年
99号　「国語表現」の挑戦
100号　これからの国語教育のために

●『国語教室』総目次掲載！
大修館書店ホームページ内「WEB国語教室」に『国語教室』総目次を掲載しました。1号から100号まで、各号掲載の記事タイトル、執筆者をご覧になれます。
▼ http://www.taishukan.co.jp/kokugo/webkoku/

国語科なんでもQ&A

Q 話し合い活動における評価のポイントは？

授業中、グループによる話し合い活動を多く行わせています。授業が活性化し、大変よいのですが、その内容をすべて聞けるわけではなく、グループごとに展開も様々であり、評価が難しいと感じています。話し合い活動における評価のポイントは何でしょうか。

千葉県・29才女性、他

A

初谷 和行（はつがい かずゆき）
貞静学園短期大学講師

話し合い活動はその性質上、話し合いを可視化し保存できるようにすることが重要です。また、「何を評価するのか（＝評価規準）」や「どのように評価するのか（＝評価方法）」を明確にすることも重要です。

話し合い活動自体が「話すこと・聞くこと」に関する評価の対象となる場合、具体的には、まず話し合うことの目標が「論拠を明確にして話し合うこと」なのか、「相手の立場や考えを尊重して話し合うこと」なのか、「進め方を工夫して話し合うこと」なのか等を明確にし、その上で目標に対する評価が確認できるようなワークシートや発問等を考えていきます。実際の話し合いでは、まず目標を学習者に明確に意識させることが大切です。活動中は机間巡視を行いながら、ワークシートの「記述の点検」や、発言等への「行動の観察」により、「関心・意欲・態度」や「話すこと・聞くこと」の評価規準に対する評価を行います。授業終了後には、回収したワークシートや録画・録音をもとに「記述の確認」や「行動の確認」を行い、より確かな評価にします。授業が積み重なった際には「記述の分析」「行動の分析」を行うことで、学習の高まりについて評価します。

話し合い活動は、その構成員により個々のパフォーマンスが変化するため、評価が難しいという声も聞かれます。ですので、生徒の特徴、話し合いのテーマなどを鑑み、話し合い活動の機会ごとにグループ構成を変化させ、その都度、個々の生徒を評価することが大切だと思います。

最後に、「評価」では、「評定のための評価」だけにせず、診断的・形成的評価で「努力を要する」状態の生徒をいかに引き上げるかが大切です。授業や単元の途中で、個々の成果と課題をフィードバックするための評価も意識したいものです。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。ご質問は小社「国語教室Q&A係」まで。

【特別記事】

「人とのコミュニケーション」及び「読書」について

――「平成二十五年度　国語に関する世論調査」の結果から

小沢貴雄（おざわたかお）
文化庁文化部国語課

一　はじめに

文化庁では、毎年、「国語に関する世論調査」[1]を実施している。本調査の対象年齢は十六歳以上であり、学校教育の現状がそのまま反映されているというわけではないが、学校教育を受けてきた人がどのような言語生活を送っているのか、その一端を考えることはできる。本稿では、「平成二十五年度　国語に関する世論調査」について述べる。

二　概要

「国語に関する世論調査」は、文化庁が平成七年度から毎年実施している。日本人の国語に関する意識や理解の現状について調査し、国語施策の立案に資するとともに、国民の国語に関する興味・関心を喚起することを目的としている。[2]対象は全国の十六歳以上の男女、三千人である。抽出方法はランダム（層化2段無作為抽出法）で、調査時期は平成二十六年三月。調査方法は、調査員が対象者宅へ訪問して個別面接での聞き取りを実施している。

今年度の調査項目を大きく分類すると、以下の七つにまとめられる。

Ⅰ　社会全体の言葉や言葉の使い方について
Ⅱ　人とのコミュニケーションについて
Ⅲ　読書について
Ⅳ　敬語について
Ⅴ　漢字を用いた語と外来語の意味・使い分けについて
Ⅵ　「～る」「～する」形の動詞について
Ⅶ　慣用句等の使い方について

今回はこの中から、「Ⅱ　人とのコミュニケーションについて」及び「Ⅲ　読書について」に注目して述べる。

三　人とのコミュニケーションについて

文化審議会国語分科会では、コミュニケーションの在り方について審議する必要があると考えており、国語分科会で今後取り組むべき課題として、「コミュニケーションの在り方について」を含めた五つの課題を設定している。[3]

このようなことを背景に、コミュニケーションに関する調査は、平成二十三年度から連続して実施している。今年度調査では、次の六つの設問を設けた。

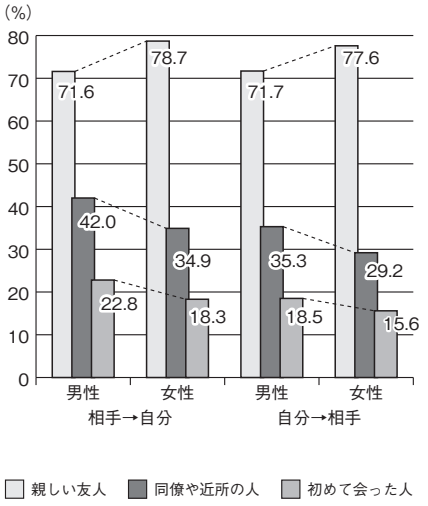
・初めて会った人とでも早く打ち解ける方か、時間が掛かる方か。
・相手から、どのように接してほしいか。
・相手に対して、どのような気持ちで接するか。
・人間関係を築くために、相手の個人的なことを知ることが必要だと思うか。
・人と接する際、相手や場面に合わせて態度を変えようとする方か。
・相手や場面に合わせて態度を変える人と、同じ態度でいる人のどちらが好ましいか。

図1は、「相手から、どのように接してほしいか。」の回答と「相手に対して、どのような気持ちで接するか。」の回答とを性別で比較したものである。

「親しい友人」から「理解されたい、親しみを持ってもらいたい」と回答した割合は、女性が男性を上回っている。また、「親しい友人」に対して「相手を理解し、親しくなりたい」と回答した割合も、女性が男性を上回っている。しかし、「同僚や近所の人」や「初めて会った人」から「理解されたい、親しみを持ってもらいたい」と回答した割合

図1

相手に理解されたいという気持ちが強い（相手→自分），
相手を理解したいという気持ちが強い（自分→相手）



は、男性が女性を上回っている。同じく、「同僚や近所の人」や「初めて会った人」に対して「理解し、親しくなりたい」と回答した割合も、男性が女性を上回っている。

このことから、相手を理解したり、自分を理解してもらうといった種類のコミュニケーションを図る上で、自分と相手との距離感の違いによる意識が、男女によって異なるということが確認できた。なお、今回の調査では触れていないが、このような違いが、コミュニケーションの手段の中心である「言葉」にどのように影響するのかにも、今後注目すべきであろう。

四　読書について

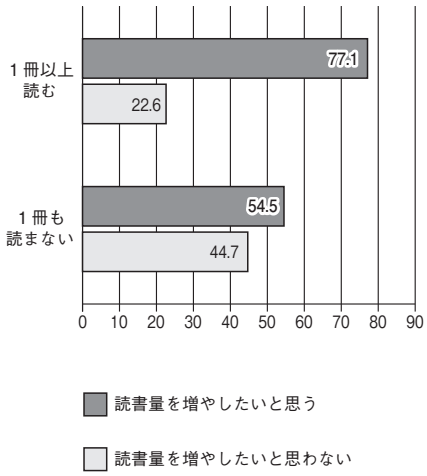
読書についての調査は約五年ごとに実施している。今年度調査では、次の六つの設問を設けた。

・一か月に読む本の冊数について。
・人が最も読書すべき時期はいつ頃だと考えるか。
・読書量は以前に比べて減っているか、増えているか。
・読書をすることの良いところは何だと思うか。
・自分の読書量を増やしたいと思うか。
・電子書籍（雑誌や漫画も含む）を利用しているか。

図2は、「一か月に読む本の冊数について」の回答と「自分の読書量を増やしたいと思うか」の回答とを比較してクロス集計したものである。

図2

問10「1か月に読む本の冊数」と
問14「今後の読書量」との関係



「読書量を増やしたいと思う」人は、一か月に一冊も本を読んでいない人（五四・五％）より、一か月に一冊以上本を読んでいる人（七七・一％）の方が、二二・六ポイント高い。逆に「読書量を増やしたいと思わない」人は、一か月に一冊も本を読んでいない人（四四・七％）が、一か月に一冊以上本を読んでいる人（二二・六％）の約二倍となっていることが分かる。

つまり、既に読書をしている人は、その後も読書を続けよう、若しくはもっと増やそうと思っているが、読書をしていない人は、その後も読書をしようと思わない傾向があるということである。継続的に読書をしていくことが、その後の読書生活に結び付いていく一方で、一度読書から遠ざかってしまうと、その後の読書活動への意欲も低下するということが読み取れる。

小学校や中学校では読書活動に意図的・計画的に取り組ませていることが多いが、高等学校になると小中学校に比べて読書に取り組ませる機会が少なくなる。継続的な読書活動のためには、高等学校においても意図的・計画的に読書の機会を設定していくことが大切であると考えらえる。

五　本調査を活用した非連続型テキストの言語活動提案

「国語に関する世論調査」の結果はこれまでも各種試験や教材等にしばしば用いられてきている。授業においても、本調査の図表を素材として取り上げ、言語活動を実践してほしい。言葉やその使い方に関する調査であるため、学習者にとっても身近な問題として捉えることができ、興味・関心を喚起できる内容になっていると確信している。

例えば、本調査を活用した言語活動としては以下のようなものが考えられる。図表から考察、分析できることを分類し、似ている考察ごとにグループを作り、読み取れることをまとめる。その後、発表やジクソー法などを通し、クラスでの共通理解を図る。最後に学習者が自分の考えを個人で再構築し、記述する。更にその内容を学習者にフィードバックできればより良いだろう。「話す・聞く」及び「書く」ことに関する言語活動が考えられる。

また、今回挙げた図を利用するならば、図の一部を隠して提示し、その隠れた部分がどのような形をしているのかを考えさせることもできる。その際の重要な点としては、なぜそう考えるのか、理由を明確に言語化させることである。隠れた部分は、必ずしも最終的に提示する必要はない。答えのない問いに対するクリティカル・シンキングする力を身に付けさせたい。

1　文化庁のウェブページに、結果の概要を掲載している。（http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/index.html）

2　国民の国語に関する興味・関心を喚起するための一つの方策として、本調査を基にして作成した「ことば食堂へようこそ！」という動画がある。これは、Youtube内のMEXTchで平成二十五年四月以降、二本ずつ配信している。（http://www.youtube.com/user/mextchannel）

3　「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」は平成二十五年二月にまとめられている、詳細は以下アドレスを参照のこと。（http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/bunkasingi/pdf/kadai_130218.pdf）

新人教師のための漢文指導入門講座⑪

「WEB国語教室」連動

熟語を訓読してみよう

塚田勝郎
筑波大学付属高等学校教諭

身近な漢文探し

漢文の学習は教科書を使って行うのが正道です。しかし、時には箸休め的な授業も、生徒の学習意欲をかきたてるのに役立ちます。漢文入門期に、「熟語を訓読してみよう」と題した一時間の授業を設定してみてはいかがでしょうか。材料となる熟語は、事前に予告して生徒に探させます。ある生徒はノートに、「身近な漢文探し」とタイトルを付けていましたが、言い得て妙だと感心した記憶があります。

集まった熟語は、国語総合教科書にある「漢語の構造」などのコラムを用いて、その構造を分類します。その上で、それぞれの訓読を考えます。以下に、熟語の分類と例語、およびその訓読を示します。例語の下の○印は正しい訓読を、×印は誤った訓読を表しています。

①主語―述語の関係

雷鳴　○雷　鳴る　×雷が鳴る
地震　○地　震ふ　×地が震える
国立　○国　立つ　×国が立てる
県営　○県　営む　×県が営む
年少　○年　少し　×年が少ない
年長　○年　長ず　×年が長い

「雷鳴」や「県営」は、「雷が鳴る」「県が営む」では不正解です。生徒は「エー」と声をあげるでしょうが、「訓読では主格に『ガ』は付けない」と指導するチャンスです。「地震」は、古語で「地 震ふ」と訓読することを強調します。「年少」や「年長」も、古典文法に習熟していない生徒には、ハードルが高そうです。

②修飾語―被修飾語の関係

新人　○新しき人　×新しい人
旧習　○旧き習はし　×旧い習わし
徐行　○徐に行く
専攻　○専ら攻む　×専ら攻める
急募　○急ぎ募る　×急いで募る
新入　○新しく入る　×新しく入る
親展　○親ら展く

ここでも、古典文法の力が訓読の正誤を左右します。「入る」は、訓読で特に注意したい読み方です。「専攻」は、「攻」の読みと意味が難しく、正答率が低いでしょう。「徐行」の正しい訓読を知った生徒は、二度と「除行」と書かなくなるはずです。「親展」の「親」の読みと意味は、大学入試の熟語問題にもよく利用されます。

③並列の関係

善悪　○善と悪と　×善と悪
開発　○開き発く
展開　○展き開く

「善悪」は、「A与」B」（AとBと）の形を定着させるために、あえて「善と悪と」と訓読させたいものです。「開発」や「展開」の訓読は、「発」や「展」の読みを推定するときに役立ちます。

④述語―補語の関係

即位　○位に即く
帰郷　○郷に帰る
要予約　○予約を要す　×予約を要する
勧善懲悪　○善を勧め悪を懲らしむ　×懲らしめる
有能　○能有り　×能が有る
無理解　○理解無し　×理解が無い

生徒は「有能」や「無理解」の補語に送り仮名が付かないことを不安に感じるようです。「多雨」（雨 多し）「立春」（春 立つ）も同様であることを示し、安心させましょう。

⑤認定の関係

不利　○利あらず
非常　○常に非ず
未来　○未だ来たらず　×未だ来ず
可動　○動くべし　×動くべき
不可解　○解すべからず　×解するべからず

「未来」は、「訓読では『来』を用いず、『来たる』と読む。」と説明する絶好の機会です。「可」の訓読には、助動詞「べし」の接続の知識が必要です。

以上のように、熟語を訓読する練習からは、熟語の構造の知識だけでなく、今後の漢文学習に役立つヒントが多く得られます。ぜひ実践をお薦めします。

なお、和製の熟語や掲示物の表記には、そのままの語順では訓読できないものが多くあります。正しい語順に改めた後に訓読させるよう、丁寧な指導が望まれます。

〔例〕立入厳禁→厳禁立入、私語禁止→禁止私語、笑門来福→笑門福来、往診可→可往診、進入不可→不可進入

＊この連載が単行本になりました。教材9本を取り上げた実践編を加え、板書・ノート指導の実例、実力評価テスト、ブックガイド、Q&Aなど、授業のヒントを満載しています。

▼『新人教師のための漢文指導入門講座』（B5判・160頁・本体2,100円）ISBN978-4-469-22240-1　好評発売中

「WEB国語教室」連動

世界の「国語」教育事情：第8回 イギリス

新井浅浩 城西大学
藤森裕治 信州大学
藤森千尋 埼玉医科大学

今回は、教育改革の渦中にあるイギリスで、一際輝きを放っている初等学校、ロックザム校について紹介する特別編です。

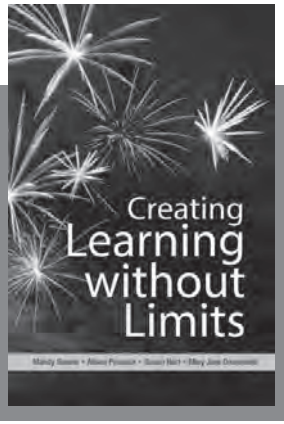
ロンドン市北部に隣接するハートフォード県に、全校児童二四二名という公立の小さな初等学校があります。学校の名を、ロックザム校（The Wroxham School）と言います。

二〇〇一年、政府機関である教育水準局による学校監査で、この学校は「特別検証の必要あり」と判定された問題校でした。イギリスでは、このような判定が下ると教育水準局の監督下におかれ、それでも改善がみられなければ校長、教員さらには学校理事会そのものが入れ替えられてしまいます。

二〇〇三年、この問題校にアリソン・ピーコックという女性校長が着任しました。瀕死の教育現場を蘇らせるためにアリソン校長が取り組んだ学校改革は、劇的な変化をもたらしました。二〇〇六年には、早くも学校監査で「極めて良い」とされ、二〇〇九年には学校監査の評価項目すべてを「極めて良い」と判定される学校になったのです。

驚くべき改善を遂げたロックザム校は、教育水準局や当時の労働党政権に注目されました。そして、政府の発行する資料に紹介されるようになっていきます。イギリスでは、二〇一〇年の総選挙の結果、政権は保守党・自民党の連立政権へと交替しました。前政権下で注目された学校が新政権が廃止されました。レベル制度に代わって取り入れたカリキュラムの基本方針は、「すべての子どもに対して高い期待をもつ」というものです。そして、この方針による教育実践のモデルとすべき理論として、ロックザム校で実践されていた「限界なき学び」の哲学が取り上げられ、政府文書やウェブサイトで度々紹介されるようになったのです。

二一世紀になったばかりの頃、ロックザム校は、『ナルニア国物語』の冬の世界になぞらえられていました。それがいまやイギリスを代表する学校の一つとして、「イギリスを変える学校」となったのです。



間もなく大修館書店より一冊の翻訳書が刊行されます。このロックザム校をケンブリッジ大学教育学部の研究チームが二年にわたって研究し、その成果を出版した『*Creating Learning without Limits*』（限界なき学びの創造）を翻訳したものです。

私たち訳者は、本書を最もよく理解する愛読者であるという自負を持っています。なぜならこの本で数多く紹介される先生方や授業実践、また、教育上の取り組みや施設を、永年にわたって実際にこの目で見てきたからです。日本とイギリスでは、文化的背景、教育制度に様々な違いがあることは言うまでもありません。しかし、そうした違いを踏まえた上でも、本書から学ぶべきものはきわめて多くあります。

まず第一に、イギリス政府も注目した「限界なき学び」という哲学、つまり、子どもの学ぶ可能性が無限であるという考え方にもとづいた実践は、日本においても十分参考になります。イギリスの初等学校をみていると、ロックザム校で行われていた実践がイギリスにおいて容易に可能だったとはいえません。しかしながら、揺るぎない信念のもとに実践を重ねてきたことが校内を変え、他の多くの学校に影響を与え、ひいては国の政策に影響を与えるまでになったのです。このことは、イギリスに限らず、日本を含めた世界の学校の実践者に勇気をあたえてくれるはずです。

もう一つは、学校を再生するにあったってのリーダーの在り方です。勉強が苦手な子どもが常にマイナスの評価を受けることで、自信をなくし学校や教室で生気を失ってしまうのと同様、学校評価で最低の評価を受けた学校や先生方は希望と意欲をなくした集団でした。そんな学校を短期間では無視されるのは世の常です。しかし、ロックザム校は違いました。政権が代わっても同校の評価は高まり続け、イギリスの代表的な実践校としての地位を不動のものとしつつあるのです。

さて、新政権下の教育省は、カリキュラムの全国基準であるナショナル・カリキュラムを全面的に見直しました。大きな眼目の一つはナショナル・カリキュラムの到達目標・学習プログラムの提示方法の見直しです。

これまで、イギリスの教育課程は、学年とは連動しない八つの発達レベルで示すという方式を採用してきました。目標・内容を学年と連動せずに発達のレベルごとに示すということは、子ども一人一人の学習の進度には差があることを認め、個に対応するという点において、導入された当初は広く歓迎されたものでした。しかしながら、その後ナショナル・カリキュラムのありかたが定着し、教室で実践されていく過程で、同じ学年の中でも、「この子はレベル２（だから）」「この子はレベル３（だから）」というように、一人一人の能力を固定的に捉える傾向がみられるようになり、子どもたちのよさや学力を十分伸ばすことができないという批判が起こったのです。

二〇一四年九月、ついにこれまでのレベル制度

再生しただけでなく、イギリスで最も注目される学校にしたアリソン校長のリーダーシップの要諦を、本書は明らかにしています。

三つめは、学校という場が子どもたちをどういう人間に育てようとしているかという問いへの答えがあるということです。ロックザム校は、まさに学校ぐるみで市民を育てている事例なのです。昨今、能動的な市民の育成を目指すシティズンシップ教育が世界的に注目されてきていますが、イギリスは、それを二〇〇二年にいち早く必修化したことで知られています（中等学校のみ、初等学校は準必修）。ロックザム校では、〈学習において選択の機会を与える〉〈子どもの声を聴く〉〈本物を通して学びを生き生きさせる〉〈学習の評価に子ども自身も関与する〉など、子どもたちが自分を表現する機会や自分のことを聴いてもらえる機会が教科学習内外にたくさん用意されています。そして、学びに限界はないことを子どもが実感するしくみがつくられているのです。

本書は、しかしながら、一つの学校の単なる成功物語ではありません。子ども全員を大切にし、その教育可能性を信じるという共通した価値をもった教師たちが、そのために、これまでと違った教育方法やカリキュラムを取り入れていくことに奮闘し、苦労を重ねた実践の記録です。本書をお読みいただき、限界なき学びの悪戦苦闘に胸を熱くして、教育に希望をいだいていただくことが、訳者の願いであり、よろこびです。

ロックザム校

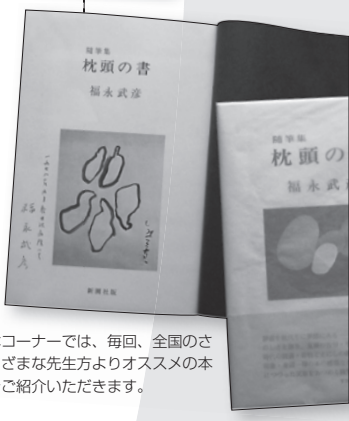
余談ですが、今年の一月にアリソン校長から嬉しいメールが入りました。教育実践の功績により、女王陛下から大英帝国勲章第二位を受け、「デイム」の称号を得たのです。

ロックザム校の活躍がますます注目を集めています。

本記事中の『*Creating Learning without Limits*』は、弊社より二〇一五年一月に翻訳刊行予定です。ご期待ください。
また、この連載は大修館ＨＰ内「ＷＥＢ国語教室」でも読むことができます。

読んできた本、読んでほしい本 ⑥

六川 宗弘（ろくかわ むねひろ）
長野県長野高等学校



本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介いただきます。

■出逢った本のつながり

学生時代に『妙高の秋』の書名に惹かれて新刊の文庫を買ったのが、長野県高遠町出身の島村利正との出逢いだった。島村の『奈良登大路町』（書影は講談社文芸文庫、二〇〇四）は、第二次大戦で奈良を空襲から救ったと云われるウォーナー博士と奈良の古美術写真館「飛鳥園」の林さんの、仏教美術を通じた交流を描いた佳品である。

島村の作品を読むため、古い文芸雑誌を手にしたことから多くの作家と出逢った。その一人に結城信一がいる。島村と同じく、知る人ぞ知る作家である。結城は『鎮魂曲』（創文社、一九六七）の「あとがき」に、フォーレのレクイエムを愛聴していたが、画家、岡鹿之助の家で、カンプラのレクイエムを聴き、心をうたれたと記していた。カンプラの曲は聴いたことがない。そこで、レコードを探しながら、相良憲昭の『音楽史の中のミサ曲』（音楽之友社、一九九三）という本も読んだ。岡は和田芳恵や福永武彦の本の装幀を手掛けていた。結城は岡のアトリエで銅版画家の駒井哲郎と出会い、生涯親交を結ぶ。人が人をつないでいくように、読む本も増えていく。

先日、古書店で福永武彦の随筆集『枕頭の書』（新潮社、一九七一）を見つけ懐かしくなった。全集が出るまでは、福永の随筆は古本でも高かった。表紙を開くと「一九七八年九月軽井沢病院にて　福永武彦」と、亡くなる一年前の署名がある。その本にはチマローザのレクイエムにこと寄せた「或るレクイエム」という友人の追悼文がある。チマローザはCDで聴いた。その頃、井上太郎『レクィエムの歴史　死と音楽との対話』（平凡社、一九九九）を読み、レクイエムは死者の「霊鎮め」ではなく、「魂の救済を祈る」ことと知り、結城の小説「鎮魂曲」など作品の読み方がかわった。

今年の茨城の全国高等学校総合文化祭の折に、五浦の天心美術館と六角堂を見た。そこにウォーナー博士の像があった。明治四十年に来日し、三年ほど五浦で天心に師事している。島村の小説にまた出逢った、と思った。

自分が読んで来た何冊もの小説や随筆の隣りにある本を手にしたことが、いつのまにか自分を文学だけでなく、音楽や美術の世界にもつなげて、広げてくれていたことを、改めて感じている。

批評と鑑賞

構造から感性へ

――『蜜柑』と『檸檬』の比較分析

伊藤氏貴（いとううじたか）
明治大学文学部准教授

『国語教室』百号をまずはことほぎたい。私自身、国語教員の資格はないが、文藝評論なぞやっているためか大学で国語教育系の授業を持たされている関係で、これまでも拝読してきた。その区切りとなる号に書けるのは光栄だ。

編集部から送られた教科書の中に、『檸檬』がまだあるのを見て、嬉しくなった。自分が教科書で読んだ中で最も感銘を受けた作品だったからだ。一人の女性をめぐって友や親を裏切ったりしたことのなかった身にとって、『こころ』や『舞姫』よりもずっと身近に感じた。時代も場所も隔たってはいたが、『檸檬』の主人公の抱えていた「えたいの知れない不吉な塊」はたしかに私のこころにも巣食っていた。

『檸檬』は、私に檸檬を片手に丸善へと向かわせた。京都のでなく日本橋店だったが。それまで紅茶のカップに添えられた輪切りしか見たことのなかった檸檬を、生まれて初めて果物屋で買い、それを手にしたときの妙な感動は、後に読んだ加藤周一の「文学の概念」における子どもの檸檬体験に等しかった。しかし既に感性の鈍磨していた高校生の私には、檸檬一個の美しさは、檸檬それ自体から直接ではなく、『檸檬』を通して出なければもたらされなかった。小説には日常の見方を変える力のあることを知ったのはこのときだった。文学に目覚めた瞬間だったと言ってもいい。

周りにも、この作品に動かされた者は少なくなかったように思う。手引きのところに載っている梶井の写真にがっかりした者たちが教室で騒いでいた覚えがある。つまりそれだけ作品そのものの繊細さに打たれていたということだ。

しかし最近の教室ではあまり受けがよくないらしい。修士論文で梶井を扱い、高校の教壇に立つかつての教え子から聞いた。ことばが古いのだろうか、もっと根本的に文学離れなのだろうか、作品世界の感性に触れる手前で立ち止まってしまうのだという。

感性の共鳴を無理強いすることはできない。言うまでもなく感性はたぶんに主観に依存しているからだ。だが、全く別のアプローチもありうる。

ここでは物語の構造分析という客観的な方法を踏まえても、『檸檬』という作品における感性の特異性に辿りつくことを示したい。それには、参照項があった方がよい。芥川の『蜜柑』はどうだろう。『檸檬』よりはよほどとっつきやすいだろうし、同じ柑橘系でもある。

以下は、私の大学の創作論の授業のごく一部のスケッチだが、高校でも十分に扱える内容だと思う。

『蜜柑』と『檸檬』という英雄物語

物語の構造分析と言っても、ここでは特段難しい文学理論の説明など要らない。ただ、主人公の気分のアップダウンと、それが物語の中のどういう出来事を契機としているか、の二点だけを抽出するだけでよい。

まず『蜜柑』で見てみよう。あらすじ紹介には及ぶまい。

1「云ひやうのない疲労と倦怠」―冒頭、汽車の発車前
2「かすかな心の寛ぎ」―発車
3「不快」―少女の出現、隧道内で戸を開ける
4「朗な心もち」―隧道を出て少女が蜜柑を投げる

主人公の気分は、マイナスからはじまって、少し上がり、そのあと再び下がり、最後に一気に上昇して終わる。

さて次は『檸檬』。

1「えたいの知れない不吉な塊」―冒頭
2「不吉な塊」が「いくらか弛」む―檸檬を買う
3「憂鬱が立て罩め」る―丸善に入る
4「微笑」み―画集の塔に檸檬を置いて逃げ去る

心の動きを上下だけに単純に二分すると、『蜜柑』と寸分違わぬことがわかるだろう。完璧な起承転結の構造。そして最後の解決をもたらすアイテムが柑橘類だという類似。

この構造はいわゆる「英雄の旅」で、ここで知的好奇心のある学生には文化人類学やユング心理学を持ち出してもよいのだが、そんなことをせずとも、このパターンがさまざまな「物語」の共通基盤になっていることは、ウルトラマンやプリキュアを例に出せばすぐにわかってもらえるだろう（これがカルチャーセンターなら言うまでもなく「水戸黄門」だ）。日常を脅かす敵が出現し、進退窮まったところで特別な力によって敵を倒し、全てが解決される。

だから『蜜柑』と『檸檬』の類似にはなんら不思議はない。ちょっとした違いは、主人公を助けるヒーローが外からやってくる（『蜜柑』）か、主人公自身がアイテムを使って敵を倒す（『檸檬』）かくらいのものである。これはすなわち前者がウルトラマン型、後者がプリキュア型であり、二種の典型と見ることができよう。

ヒーロー物の物語として読むことで、『檸檬』のことばのとっつきにくさは幾分でも解消できるのではないだろうか。

さてだから、作品としての特性は、この先にある。『檸檬』が特に感性的な作品だと言えるのもここからである。

『檸檬』の「文学的」感性

『蜜柑』はすぐれて視覚的な作品だ。冒頭、「或曇った冬の日暮」にはじまり、色彩のないモノクロの世界が描かれる。そしてそれが「その時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい」と言われるように、主人公の心象世界でもある。

そこに闖入する少女はしかし逆に色彩の塊である。「日和下駄」を履き、「皺だらけの両頬を気持の悪い程赤く火照らせ」「萌葱色の毛糸の襟巻き」をし、「霜焼けの手」には「三等の赤切符」が握られていた。ここから、モノクロの世界とカラーの世界の葛藤がはじまる。主人公の灰色の不快は、隧道に入り、開けられた戸から吹き込む煤煙によって完全に黒に塗りこめられようとする。モノクロの世界がいよいよ勝利するかに見えて、そのとき汽車は隧道を出て、少女が取り出した『蜜柑』というヒーローアイテムによって一瞬にしてカラーの世界へと塗り替えられてしまう。

この色彩の大逆転の鮮やかさこそがこの作品の最大の見所だと言ってよいだろう。映像なら、まずは全体をモノクロで撮り、少女だけをカラーにしておいて、隧道内で真黒に、そしてそこを出て少女が外に向かって撒く蜜柑から画面全体がカラーに変容する。陳腐だが、こうした演出が誰しも思い浮かぶに違いない。

一方、『檸檬』にも視覚や色彩にすぐれた表現はたくさんある。最後の、画集を積み上げて、上に檸檬を一つ置いたタワーは言うまでもなく、花火の描写、果物屋の描写、檸檬そのものの描写もそれぞれ美しい。ただ、そのすばらしさは、たんに視覚がそれ自体として閉じていないところにある。これが『蜜柑』との大きな違いである。

『蜜柑』においては、視覚世界はすべてそれだけで独占的に主人公の内面を表わしていた。それはそれで見事だが、鮮やかすぎて作り物めいたところが見えすくのも否めない。

しかるに、『檸檬』においては視覚は他の感覚とも結びつき、また比喩というかたちで視覚以外の物を使って表現されもする。

> 何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面――的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まったというふうに果物は並んでいる。

音楽が色彩の塊になるとは不思議きわまりない観念的表現にも思えるが、しかし、視覚・聴覚など、感覚を五つに截断することの方が実のところよほど観念的なことだ。われわれの日常において、諸感覚が独立して一つだけであることはほとんどない。一顆のレモンを見たときに、われわれはその質感や重量をも自然に感じ取る。視覚と触覚とは切れ目なく繋がっているのが通常だ。嗅覚と味覚の関係については言うまでもない。たとえば視覚と聴覚の「共感覚」が異様なこととされるのは、むしろ五感への細分化が生んだ近代の病かもしれないのだ。

しかも、近代は視覚と聴覚を優遇し、残りの三つを「劣等感覚」と貶めた。対象との距離がとれない＝客観視できないからだ。『蜜柑』は視覚という近代の最優等生の作品だ。

しかし、『檸檬』は劣等生に溢れかえり、しかもそれが互いにまじりあう混沌状態を呈している。「あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか」。ここで味覚はむしろ口腔内の触覚の謂である。そして主人公の手にした檸檬こそは、先ほどの視覚聴覚に加えて、冷たさやら香りやらで満たされた諸感覚の塊なのだ。

文学の凋落が語られて久しいが、その一方で台頭する映像表現に対して文学が対抗しうる有力な武器の一つは、この劣等感覚の表現である。『蜜柑』は映画で見てもそれなりにおもしろかろう。主人公は蜜柑の香りを嗅いですらいない。しかし『檸檬』が映像化されたときにその魅力は半減どころでは済まない。諸感覚の中でも「劣等」感覚を伝えるのは今のところまだことばの特権だからだ。

そのもたらす感銘は、感性の共鳴、と言って間違いではないが、しかし、感性とは頭の中に閉じているものではなく、きわめて身体的なものだ。『檸檬』の感動の焦点は「えたいの知れない不吉な塊」という抽象的・観念的なものにあるとしても、それを感銘をもって伝えるには身体的な共鳴が必要だ。そして文学のことばには3D映画よりももっと身体を震わせる可能性がある、ということを『檸檬』は教えてくれる。

来年、京都に丸善が再出店するという。文学のことばに身体で共鳴した若者たちが檸檬を握りしめて店につめかけんことを。

なぜ今、「聞き書き」なのか

中井 浩一（なかい こういち）
国語専門塾鶏鳴学園塾長。国語教育、作文教育の研究を独自に続ける傍ら、90年代から進められている教育改革についての取材を続けている。

1 教育としての「聞き書き」

聞き書きとは、普通は「ひとり語り」の文体で本人の語り口を生かした自伝や体験談を指す。矢沢永吉の『成りあがり』やアメリカの黒人解放運動のリーダー『マルカムX自伝』などが有名だ。近年では政治学者の御厨貴が、政治家への聞き書き「オーラル・ヒストリー」をまとめている。民俗学の柳田国男や宮本常一などの仕事も有名だ。

しかし私は聞き書きをもっと広く考え、人に取材、インタビューをし、その内容を文章にまとめたもの一般を考える。それは民族学、文化人類学、歴史学のフールドワークでも駆使される技術であり、ジャーナリストにとっては必須の技術だ。本多勝一の『中国の旅』、立花隆の『宇宙からの生還』などをすぐに思い浮かべることができるだろう。

私はその聞き書きを教育現場での教育手法として実践を重ねてきた。それは現代の若者たちの抱えている問題の解決に非常に有効な手法であり、現行の学習指導要領でも大きく取り上げられている。

2 若者たちの課題とその解決策

今の高校生に広く見られる問題とは、将来像がなく、進路・進学意識があいまいなことだろう。それは彼らに人生の目標や方針がなく、社会に対する特段の問題意識やテーマがないことを意味する。また、彼らの人間関係の問題も深刻だ。現代の高校生はメル友などは多くいても、その内面はきわめて孤独である。友人、親や教師たちとの関係は表面的で、激しい対立や深い相互理解の経験は少ない。

そこで、根本的な対策が問われるのだが、高校生一人一人が問題意識を持ち、自分固有の「問い」、テーマを育てることが対策の核心ではないだろうか。それが大学で学ぶことや社会で働くことを方向付けていく。そして問題意識を作る過程で、他者との深いかかわりを体験する必要があるだろう。

では、そのためにはどうしたらよいのか。

（1）個人的な体験を掘り起こし、個人的な体験の意味を考えさせること。（2）現実社会（自然も）の問題にぶつからせ、その問題の本質を考えさせること。（3）その問題と、自分の生き方を関係させて考えさせること。

以上の三つの課題を達成することが必要だ。これは本来は学校全体で取り組む課題だが、その中で表現指導の観点が重要である。

（1）は本人の個人的で主体的な側面。（2）は社会的な側面、客観的な側面であり、「調べて書く」作文。説明文、意見文、記録文、観察文、報告文、レポートなどだ。この（1）と（2）を総合するのが（3）だ。（1）と（2）を結び付け、本人の問題意識を作り、テーマを自覚する段階。受験学年で書く志望理由書や論文（小論文）である。

以前は（1）だけでも自分のテーマを作りだすことができたが、現在はそれは難しい。だから（2）の「調べて書く」段階が不可欠になる。自己（主体）を確立するためには、（1）の自己が（2）の客観世界の厳しさによって、いったん徹底的に否定されることが必要だ。高校生たちの持っている先入観や既成概念が壊れる必要がある。そして、その葛藤をくぐりぬけることで、真の主体（3）が生まれてくるのだ。したがって（2）の調査では、単に文献やウェブだけではなく、現場に乗り込んでのフィールドワーク、そこで働く人へのインタビューが重要だ。つまり聞き書きの指導である。

このように、表現指導全体の中に聞き書き指導を位置づけることを提案したい。ところで、以上のような現状分析と対策について、私と問題意識を共有するのが今回導入された学習指導要領である。

3 学習指導要領が問いかける問題

現行の学習指導要領には画期的な点がある。①全教科での言語活動を求め、②その中心に国語科を位置付け、③高校生の体験、現場調査（フィールドワーク）を重視したことだ。

その言語活動の柱の一つとして「関係者にインタビューしたりして調べた内容を整理」（これが「聞き書き」である）することが強調され、社会科や理科、保健体育などのすべての教科でそうした活動が求められた。またその中心的役割を国語科が担うことが求められ、国語科の教科書では聞き書き・インタビューが教材として取り上げられている。

この方向性は正しいのだが、それだけに課題も大きい。全教科に、教科学習と現場学習の統一的指導が求められ、従来の教科の壁を壊した横の連携が求められた。「国語科」にその指導的役割を求めることで、国語科とは何か、他教科とは何が違うのかが初めて真っ正面から問題にされることになった。例えば、理科や社会のレポートと国語科の表現とはどう関係すべきなのか。

近々刊行予定の『「聞き書き」指導が生徒を変える』（仮）は、私が関わっている研究会での三年間の共同研究の成果をまとめたものだ。聞き書きの指導方法を初めての方にもわかるように丁寧に説明したものだが、単なるマニュアル本ではなく、聞き書きの本質や、学習指導要領が提起する問題解決への試案を提出した。ぜひ参考にしていただきたい。そして、私たちの仲間が増えていくことを期待している。

古典のとびら

夢かうつつか

岸田 知子
中央大学文学部教授

「胡蝶の夢」ということばがある。これは古代中国の書物『荘子』斉物論篇に由来したものである。

昔、荘周 夢に胡蝶と為る。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩しんで志に適ふかな。周たるを知らざるなり。俄然として覚むれば、則ち蘧蘧然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶為るか、胡蝶の夢に周たるか。

荘子が夢で蝶になって飛び回り、心から楽しんでいた。ふと目をさました荘子は、自分は本来人間であってその夢で蝶になったのか、いや本当は自分は蝶でその夢で人間になっているのか、わからなくなったという話である。画題にもなっていて、居眠りをしているおじさんの周囲に蝶々が飛んでいれば、その人は荘子だということになる。

荘子という人は、物の大小、長短、美醜といった差は、離れた立場からみると皆無になるという考えを持っていた。何万里も離れた天空から地上を見ると、大きな生き物も小さな生き物も塵に等しいではないか。何万年も生きるものから見れば、一日の命のキノコも百年の命の人間もたいした違いはないではないか。いかに美人であっても、池の魚は逃げるではないか。この考えを「万物斉同」――あらゆるものは等しく同じ――という。

この考えから見ると、現実も夢も相対するものではないのである。荘子は人生そのものも大きな夢かもしれないという。真の目覚めがあって、はじめてそれが夢であることに気づくのだが、たいていはそうとは気づかないまま一生を終える。こざかしい知識をふりかざして、人間と蝶の区別を語っている自分が、ひょっとすると蝶の見ている夢かもしれないのである。幸せの絶頂にいるとき、思わず「夢なら覚めないで」という。その幸せが夢か現か。覚めるからこそ夢であったことに気づくのである。覚めなければ、それが夢であっても当人にとっては現なのである。蝶になった荘子の夢が覚めなければ、荘子は蝶としての一生を終えるだけである。

夢というものは、古今東西にわたって、数多くの話題や問題を提起してきた。近代ではフロイトの夢判断による深層心理学が有名である。古代中国の書物にも夢にまつわる話は多い。それらの中には、死んだ人物が夢に現れて語りかけるという話が多く見られる。

『春秋左氏伝』（宣公十五年）に次の話がある。

初め魏武子に嬖妾有りて子無し。武子疾となり、顆に命じて曰はく、「必ず是を嫁せよ」と。疾病なれば、則ち曰はく、「必ず以て殉と為せ」と。卒するに及び、顆 これを嫁して曰はく、「疾病なれば則ち乱る。吾れ其の治に従はん」と。輔氏の役に及び、顆 老人の草を結んで以て杜回に亢ふを見る。杜回 躓きて顛る。故にこれを獲たり。夜、これを夢みるに曰はく、「余は而の嫁せし所の婦人の父なり。爾 先人の治命を用ゐる。余 是を以て報ず」と。

魏武子が病気になったとき、息子の顆に「自分が死んだら愛人を嫁にやってくれ」と言った。病が重くなったときには「必ず彼女を殉死させよ」と言った。武子が亡くなると、顆は彼女を嫁に送り出し、こう言った。「病気が重くなれば気が乱れるものだ。私は小康を得ていた時の考えに従うまでだ」と。さて、輔氏というところで戦乱が起こった。顆は、老人が草を結んでいるのを見た。敵の杜回は草に足を取られて倒れたため、捕らえられた。その夜、顆の夢に老人が出てきて「私はあなたが嫁にやってくれた女の父です。あなたに恩返しをしたのです」と言った。この老人はすでに死んでいるのである。ここから「結草」――自分が死んだ後で人に恩返しをする――ということばが生まれた。

死んだ人は夢の中でのみ語ることができる。すなわち、夢は生の世界と死の世界をつなぐものと考えられていたのである。人は夢を見ることで、死んだ人と出会い語ることができるのである。

われわれの身近でも、病の床の夢で、今は亡き肉親に出会い、誘われるままについていったが途中はぐれて目が覚

めた、などという話を聞くことがある。それは危なかった、ついていったらきっと死の世界に行っていただろう、などと周りの人々と語り合うのだ。夢が生と死の境界にあるとする考えは、われわれの中にもひそんでいるのである。

現代では夢は大脳生理学の研究対象となっているが、まだまだ解明されていないことも多いという。夢で蝶になったときの荘子の脳はどういう動きをしていたのだろうか。

「酔生夢死」――酒に酔い夢を見て一生を終える――ということばもある。これは、何もせずに一生を終えることを批判した宋代の学者のことばだが、むずかしいことは考えずに、こんなふうに過ごしたいと「夢」見る人もおられることだろう。

さて、現に暮らす人にとって夢ははかないもの、あてにならないもの、言い換えると「幻」のようなものであるはずなのに、最近、「夢」という字を使った名前が多くなった。これはなぜだろう。卒業式の色紙に「夢」と書いて、周りに寄せ書きをするシーンも珍しくない。これはなぜだろう。答えは筆者の近著『漢語百題』に。

ところで、『論語』述而篇には、

甚だしきかな、吾が衰えたるや。久し、吾れ復た夢に周公を見ず。

という孔子の言葉がある。

一方、『荘子』大宗師篇には、

古の真人、其の寝ぬるや夢みず。

とあり、また刻意篇に、

（聖人）其の寝ぬるや夢みず、其の覚むるや憂ひ無し。

とある。真人や聖人といわれる人は、寝ても夢を見ないし、目覚めていても悩み事はないというのである。

江戸時代後半期の大坂の町人学者山片蟠桃は、主著『夢ノ代』経論篇で、夢について次のように述べている。

凡ユメハ半寤半寐ノ間ニ見ルモノ也。

すべての夢は半分寝ていて半分起きている時に見るものである。その夢の内容は、

半寤半寐ノ時ニ、雑慮ノヤウナルモノアリテ夢ニナル也。

半分起きていて半分寝ている時にさまざまな思いが頭にあって、それが夢になる。

つまり雑慮がなければ夢を見ることはないとなるはずだが、蟠桃は聖人にも種々の雑念はないとはいえないという。ただ凡愚の人の雑念とは似ても似つかないだけである。聖人は夢を見ないという『荘子』の言葉は「妄説」なのであるという。

合理主義者の蟠桃は、夢に特別な作用があることを認めない。たとえば、夢で会った人を現実に探し出すという話は中国にも日本にもあるが、それらに疑問を呈する。

『史記』殷本紀には次の話がある。

武丁（殷の高宗）夜に夢みて聖人を得たり。名を説と曰ふ。夢に見る所を以て、羣臣百吏を視るも、皆非なり。是に於いて迺ち百工をしてこれを野に営求せしめ、説を傅険中に得たり。是の時、説　胥靡為りて、傅険に築く。武丁に見ゆるに、武丁曰はく是れなりと。得てこれと語るに、果して聖人なり。挙げて以て相と為す、殷国大いに治まる。故に遂に傅険を以てこれに姓とし、号して曰はく傅説と。

高宗は夢の中で聖人に会った。名を説といった。羣臣たちの中を見回してもそんな人はいない。そこで多くの職人たちに探させると、傅険の工事現場で見つけた。その時、説は奴隷で、傅険を築いていた。高宗に見せるとこの人だという。話をすると聖人であった。そこで彼を相に取り立てると、殷はよく治まった。工事現場の傅険から姓を取り、傅説と呼んだ。

日本では、後醍醐天皇が夢で楠正成を知り、幕下に招き入れたという話がある（『太平記』巻三「主上御夢事」）。蟠桃は、どちらも姦計、つまり悪だくみであって、民衆を欺くために仕組んだのであるという。つまり、あらかじめこれという人物と話を合わせておいて、まるで夢が引き合わせたという筋書きに仕組み、王者の権威を強調するのだという。

現代のわれわれはかなり合理主義的な考えを持つようになっているが、蟠桃の論理は余りに「夢」のないものといえるのではないだろうか。「夢のままにしておいて」と言いたくなる。

文中でも触れたが、筆者は近々『漢語百題』を出版する。漢字や漢語の表ばなし、裏ばなしに興味をお持ちの方、ぜひご一読を。

「1番」と「一番」

鳥飼 浩二
『明鏡国語辞典』編集委員

大学生や高校生の作文に、「1番大切なことは…」「1番の目的は…」など「1番」の表記をしばしば見かける、という話を先日聞きました。これは、漢字で「一番」と書くべきところを算用数字の「1」を用いて「1番」と書いているのですから、日本語の表記法としては不適切な書き方ということになります。

と言っても、文章中の数字を漢字で書くか、算用数字（アラビア数字）で書くかの基準は、なかなか難しいところがあります。生徒だけでなく大人でも、明確に学習したという人は少ないのではないでしょうか。数字表記の統一的な決まりはなく、基準は一律ではないため、いろいろな表記法が行われているのも実情です。

しかし原則とも言えるルールがあり、そこから外れると、冒頭の作文の例のように「おかしい」と感じられてしまいます。その原則とは、「その数字を含んだ表現全体で特定の意味を持ち、その数字を他の数字に自由に置き換えられないものは、算用数字では書かない」というものです。例を挙げてみましょう。

○**世界**一、高い山　×**世界1**、高い山
○政界の一**匹狼**　×政界の**1匹狼**
○一**点**の疑念もない　×**1点**の疑念もない
○二**枚目**のスター　×**2枚目**のスター
○二**つ返事**で引き受ける　×**2つ返事**で引き受ける
○空振り三**振**　×空振り**3振**
○石の上にも三**年**　×石の上にも**3年**
○**四六時中**、文句を言う　×**46時中**、文句を言う

「世界一」も「二つ返事」も、この表現全体で、「世界で一番であること」「快くすぐに承諾すること」という特定の意味を持つ言葉です。そして、「世界二」「世界三」「世界四」や、「一つ返事」「三つ返事」……などとは言わないように、他の数字を自由に当てはめられません。これらの「一」や「二」は、熟語や成句の一部として用いられているため、漢字で書くのがふさわしく、計算に用いる算用数字では不適切になるのです。これは、縦書き・横書きを問わず適用される原則です。

冒頭の「一番大切な」「一番の目的」も同様でしょう。これらは「最も」「他よりも優先する」などの意味の熟語で、「一番」が特定の意味を持っています。そして、二番・三番・四番……など他の数字の熟語は用いません。

「一番」の場合、だいたい、次のような使い分けとなります。

熟語や成句として、漢字で書く

一番好きな歌手・一番前の列に座る・朝一番に電話を入れる・町一番の歌い手・風邪は寝るのが一番だ・（大相撲の）結びの一番

数値として、漢数字でも算用数字でも書く

番号が一番［1番］の人は手を挙げてください・一番［1番］と二番［2番］の歌詞を覚える・交響曲第一番［第1番］・一番［1番］ホーム

横書きの文書を書くことが以前より多くなり、また、校正を経ない文章に接する機会が増えていることもあって、現在、数字をめぐる表記は混乱しているように見受けられます。『明鏡国語辞典 第二版』では、「漢数字で書くことば」というコラムを「一（いち）」の項目の末尾に新設し、一般的なルールを示しました（105ページ）。どういう場合の数字を漢字で書くのか（算用数字では書かないのか）をこのコラムにまとめましたので、ぜひ作文指導などに役立てていただけたらと思います。

塚田勝郎　著

〈新人教師のための〉漢文指導入門講座

B5判・並製・一六〇頁
定価＝本体二二〇〇円＋税

評者＝北久保友希
都立南多摩中等教育校教諭

漢文の面白さを伝えたいと、漢文を教える教師ならば誰もが思うだろう。しかし、多忙な毎日の中で殊更に「面白さ」を伝えられているかと問われると耳が痛い方も少なくないのではないか。「面白さを伝える」という初心を貫くために、具体的にどのような教材研究と授業計画、指導をすべきかが述べられているのが本書だ。

教壇に立って間もない若手や国語教師を目指す学生に向けて「矛盾」に始まる定番教材九本が丁寧に解説されているほか、板書・ノート指導や辞書指導、音読指導、そして教材研究の方法や心構えまで、実に詳細に述べられているのが特徴だ。資料編で漢文指導に必須の基礎知識が一覧できるのも有り難い。

がむしゃらに教材研究に明け暮れたと自負している教員であっても、自らの教材研究の方法に限界を感じることもあるだろう。自己流を省みるきっかけとしても、本書は有効である。一度目は自己流を改めるために、二度目以降は初心を思い出すために。何度も読みたい本だ。

松原朗　著

漢詩の流儀——その真髄を味わう

四六判・上製・三〇六頁
定価＝本体二二〇〇円＋税

評者＝紺野達也
神戸市外国語大学外国語学部准教授

文学、特に長い歴史を持つ漢詩（中国古典詩）には様々な作り方（読み方でもある）がある。本書はこれを〝流儀〟と呼び、テーマ・歳時・詩語に即して紹介する。

著者の考えによれば、漢詩人は決して自由に詩を読み、作ったのではなく、それまでの文学の流儀をもとに詩を鑑賞し、創作してきた。この点で「序章」にいう漢詩における政治への強い関心や余韻の重視は漢詩の流儀のなかでも本質的かつ典型的なものである。もちろん、本書を一読してわかるように、テーマの発生や流行、詩語のイメージの強弱など、個々の様相は一律ではない。ただ、重要なのは、そのような流儀が確かに、そして重層的に存在するからこそ（さらに特有の韻律とあいまって）漢詩の豊かな表現世界が生まれ得たことだろう。

現在、国語教育で漢詩にかけられる時間は少ない。しかし、それゆえに本書を通じて漢詩の〝流儀〟とそれが織りなす多彩な世界を味わい、伝えてほしいと願っている。

中井浩一・古宇田栄子　編著

「聞き書き」指導が生徒を変える

近刊

A5判・並製・二八八頁（予定）
予定価格＝本体二三〇〇円＋税

評者＝古田健二

取材やインタビューを行い、それを文章にまとめるためには、「聞く・話す」「書く」「読む」といった言語活動をフル活用することが不可欠だ。本書を読むと「聞き書き」がいま求められる「教科の枠を超えた言語活動の充実」にうってつけの指導法であることが納得できる。

筆者は国語専門塾での指導の傍ら、「聞き書き」指導の実践と研究を重ねてきた。本書は、学校教育の枠組みの中でできる指導のノウハウとその可能性をまとめたものだ。

ここで身につくのは言葉の力だけではない。「聞き書き」は「自分探し」を卒業し「自分作り」を始める契機となる。体験に裏打ちされた思考力は、小論文はもちろんのこと、AO入試でも効果を発揮するという。

論より証拠、まずは収録された生徒作品例を読んでいただきたい。また、立花隆氏へのインタビュー、塩野米松氏との対談も実践的で大いに参考になる。

まずはできるところから。新たな一歩を踏み出す勇気を与えてくれる一冊だ。

岸田知子　著

漢語百題

近刊

四六判・並製・二五六頁（予定）
予定価格＝本体一六〇〇円＋税

評者＝楠原かずみ

日頃つきあっている友達の意外な一面を知るとびっくりする。そのことで余計に親しみをもったり、一目置いたり。「漢語」という古くからの友達の新しい面、知らなかった面をこの「漢語百題」は教えてくれる。

漢字は東アジアの共通言語だ、と言われる。台湾旅行に出かけた際に、メモ帳と鉛筆を駆使した筆談は大いに威力を発揮した。同じ意味の「漢字」を使っている強みだろう。けれど、意味のずれを感じることもあった。長い間にそれぞれの国で変化・進化していったからだ。

本書に描かれる、漢語の意味や使われ方の変遷は、ちょっとドラマティックで意外性にとんでいる。例えば「丈夫」が元は成人男性の意味だったなんて、今の使われ方からは想像がつかない。

元々は、WEBに連載していたものなのだそうだ。一つ一つの項目が独立しているので興味をもったタイトルを拾い読みするもよし、頭からじっくり読むもよし、自分の知らなかった「漢語」の一面を知るのは面白い。

「国語総合」「現代文A」「現代文B」

随想・評論・小説教材一覧

平成27年度用「国語総合」「現代文Ａ」「現代文Ｂ」教科書に収録されている随想・評論・小説教材を、作者別五十音順に配列した。

教材名とそのジャンルは原則として各教科書の表記・分類に従ったため、教材によっては、同じ文章が異なるタイトルで掲載されていたり、複数のジャンルに重複して分類されていたりする場合がある。

出版社名、教科書番号、教科書名、教科書略称についてはリスト末に示した。（編集部）

■随想

アーサー・ビナード	鈴虫の間、ぼくの六畳間	筑現B
青木　玉	月あかり雪あかり花あかり	明現B
明川哲也	沙魚	桐探B
芥川龍之介	人生	教現A
阿刀田高	犬も歩けば棒に当たる	第現A
あわやのぶこ	空飛ぶ魔法のほうき	大新B
池田晶子	〈魂〉の考え方	筑現B
石田衣良	あたりまえなことにありがとう	三明国
石牟礼道子	「迷う」力のすばらしさ	大現A
茨木のり子	後生の桜	大新B
内田　樹	空と風と星と詩	教現B
内山　節	負け方を習得する	筑精B
	春	三明B
	情景のなかの労働	東新B
大江健三郎	ある時間、待ってみてください	筑国総
	チャンピオンの定義	筑精B
	どんな人になりたかったか？	大新B
	同情トイフコト	教現B
大脇三千代	わたしはあなただったかもしれない	第現A
小川洋子	人と人が出会う手順	数高国
	数の不思議に魅せられて	第新国
	誰の目にもふれないところで	三明B
長田　弘	レオーノフの帽子屋	桐探国
	自分の時間で読み継ぐ	東国総
	歩く人	筑現B
加賀美幸子	メッセージ探しの旅	大新国
角田光代	ベトナムのコーヒー屋	三明国
	闇がなければ	大新B
	待つということ	三明B
梯久美子	少女たちの「ひろしま」	東国総
河合隼雄	ふしぎと人生	桐探国
	花女房	第現A
河合雅雄	身近な動植物の名を覚えよう	第新国
川上弘美	境目	筑精国
	排球、そして千利休	三現A
川上未映子	ぐうぜん、うたがう、読書のススメ	大現A
川畠成道	耳を澄ませば世界は広がる	三精国
姜　尚中	おまえはどこに立っている	第標B
	大人への丸太 たじろがず渡ってみよう	明現B
	花のいざない	教現B
観世寿夫	言葉は変わるもの、されど伝承すべきもの	第訂国
北原保雄	どうすれば虹の根もとに行けるか	第国総
黒井千次	ツゴイネルワイゼン	大新B
黒柳徹子	黄色い花束	明精国
	カフェの開店準備	三明国
小池昌代	背・背中・背後	第標国
	楽に働くこと、楽しく働くこと	桐現B
小関智弘	機械を捨て、まちへ出よう	数国総
小松正史	ズルい言葉「してあげる」	東新B
酒井順子	「私」という「自分」	筑国総
鷺沢　萠	ももこのいきもの図鑑	三明B
さくらももこ	春の小川の思い出	第標B
佐藤勝彦	人はなぜ宇宙を思うのか	大新B
佐藤克文	ペンギンはなぜ一列になって歩くのか？	三明B
佐藤雅彦	情報の力関係	第新国
	前の駅出ました	大新B
	隣の校庭	三明B
塩野米松	働く喜び　技持つ体で	東新国
白鷹幸伯	鉄、千年のいのち	三明国
須賀敦子	クレールという女	東新B
	となり町の山車のように	筑精国
塩一トンの読書		東新B

高山宗東　「マジ？」　第標B
多田富雄　体の声を聞く　第標国
立花　隆　謎の空白時代　桐国総
立松和平　幸せの分量　大現A
多和田葉子　「ふと」と「思わず」　大新B
　ゆずる物腰ものほしげ　明国総
　猫のしあわせ　明精国
俵　万智　さくらさくらさくら　数国総
　情けは人の…　東現B
手塚治虫　世界は謎に満ちている　東現A
寺山修司　言葉を友人に持とう　東新B
野口聡一　ワンダフル・プラネット！　第標B
蜂飼　耳　虹の雌雄　教現A
馬場あき子　桜との出会い　大新国
林　望　夢を建てる人々　筑国総
日高敏隆　里山物語　明精B
平出　隆　はじめての失敗　大新B
福岡伸一　ルリボシカミキリの青　東新国
藤原智美　三人の人類　明現B
別役　実　なまけものコンプレックス　東新国
辺見　庸　食と想像力　東精国
星野道夫　声の諸相　第標B
　アリューシャン、老兵の夢と闇　桐探国
　ワスレナグサ　筑精B
　十六歳のとき　桐国総
堀江敏幸　此処に井戸水と葡萄酒があるよ　第標B
真木悠介　エローラの像　第新国
松浦寿輝　「映像体験」の現在　教国総
松沢哲郎　心、言葉、きずな　第訂国
三浦しをん　求めるものに応えてくれる　第標国
三木　清　旅について　東新B
水木しげる　のんのんばあと妖怪たち　三現A
宮本　輝　本を積んだ小舟　教現A
村上春樹　自己とは何か（あるいはおいしい牡蠣フライの食べ方）　筑現B
茂木健一郎　最初のペンギン　桐探B
森　鷗外　サフラン　三精B
柳田國男　清光館哀史　明現B
吉田直哉　出島のチューリップ　筑現B
吉田喜重　偽りの答案　第現A
よしもとばなな　珊瑚　桐探B
リービ英雄　詩を翻訳する少年　東精国
　想像への畏敬　明現B
　路地の奥の家　教現B
鷲田清一　「待つ」ということ　筑精B
　わかりやすいはわかりにくい？　三精国
　言葉のちぐはぐ　三精B
渡辺美佐子　りんごのほっぺ　数高国
　　東新国

■評論

青木　保　異文化理解　明精B
　世界は、いま―「多文化世界」の構築　明精B
赤坂憲雄　木を伐る人／植える人　大精B
　　第訂国　三現B　桐探B
阿部謹也　「世間」とは何か　桐現B
安部公房　日常性の壁　明現B
尼ヶ崎彬　姿――日本のレトリック　明国総
　模倣と「なぞり」　大現B
安斎育郎　思い込みの危険性　筑現B
飯田朝子　数え方で磨く日本語　第標B
池内　了　かんじんなことは、目に見えない？　第現A
　マンモスの歩いた道　教新B
　科学・技術・社会　明国総
　技術が道徳を代行する時　明精国
池上嘉彦　思考バイアス　数高国
　新しい博物学を　東国総
　「プーポー」と「マンマ」の記号論　筑精B
　ものと記号　第標B
　言語と文化　三精B
　言葉についての新しい認識　東精国
　「もの」の科学から「こと」の科学へ　東精国
　科学はどこまでいくのか　筑国総
　ものまね上手・創造上手の日本技術　筑国総
　今ここにある無数の未知　三精国
　歩き続けるための読書　大国総
　未来をつくる想像力　大精国
　ある〈共生〉の経験から　第標国
　「環境史」から考える　第訂国
　手を見つめる　東精国
　「名づけ」の精神史　東新国
　考える言葉　明精B
　コミュニケーションは創造的に　筑現B
　共生への冒険　第標国
井上達夫　言葉と世界　教現B
今井むつみ　言葉と世界　東現A
今福龍太　エコロジーのミューズを求めて　東新B
　バイリンガリズムの政治学　数現B
　ファンタジー・ワールドの誕生　筑現B
　意味論的旅と越境　桐探B
　抗争する人間　明精B
今村仁司　市民社会化する家族　東精B
　「ものさし」の恍惚と不安　桐探B
入不二基義　おカネでは買えぬもの　筑精国
岩井克人　ホンモノのおカネの作り方　桐国総
　　東新B　三現B　三明B　大現B　数現B
　マルジャーナの知恵　三国総　筑精国

貨幣共同体　筑精B
経済の論理／環境の倫理　桐探国
広告の形而上学　東精国
未来世代への責任　東国総
　　筑国総
　　三精B　第現B　明現B
上田篤通　潤橋―橋と日本人　明現B
上田恵介　ウサギの耳はなぜ長い？　大現A　大新B
上田紀行　「内的成長」社会へ　数現B
　グローバリズムの「遠近感」　第訂国　第国総
内田　樹　「身銭」を切るコミュニケーション　東精B
　「贈り物」としてのノブレス・オブリージュ　大現B　大精B
　ことばとは何か　筑精国
　なぜ私たちは労働するのか　三精国
　言葉は「ものの名前」ではない　桐現B
　胆力について　数現B
　働くことの意味　明国総　明精国
　彼らがそれを学ばなければならない理由　教新国
　物語るという欲望　筑精B
　歴史は「今・ここ・私」に向かってはいない　桐探国　桐国総
　話を複雑にすることの効用　筑国総
内山　節　「おのずから」を感じ取る　東現A
　ブナの森で　教国総
　結ばれていく時間　筑精国
　時間と自由の関係について　東精国　東国総　数国総　数高国
　時間をめぐる衝突　明国総　明精国
　自然と人間の関係をとおして考える　大国総　大精国
　余暇について　三国総
　連帯という言葉の意味　第現B
宇野重規　〈私〉時代のデモクラシー　第標B　筑国総
梅田望夫　「ネットの時代」をどう生きるか　第新国
江下雅之　ネットワーク上のコミュニケーション　桐探B　大現B
榎本博明　自己とは一つの物語である　第現B
大井　玄　ゲラダヒヒの平和社会　教新B
大浦康介　虚構の知恵―「ウソ」の効用　数現B
大岡　信　言葉の力　桐探国
大澤真幸　サッカーにおける「資本主義の精神」　桐国総
　リスク社会とその希望　東精B
　自由の優越＝困難　筑精B　明国総
大竹伸朗　トースト絵画　明国総
大西赤人　判断停止の快感　筑精B
大庭　健　動物の信号と人間の言語　三精B
大森荘蔵　見る―考える　桐探B
岡　真理　「文化が違う」とは何を意味するのか？　三国総
　開かれた文化　数現B
　虚ろなまなざし　三現B　三精B　筑精B
　虚構のリアリズム　教現B
岡本太郎　ピカソへの挑戦　教新B
小川眞里子　絵はすべての人の創るもの　第国総　明現B
小熊英二　科学的「発見」とは　東精B
長田　弘　グローバリゼーションの光と影　筑精B
梶井厚志　アイオワの玉葱　数国総
柏木　博　「わらしべ長者」の経済学　数高国
　「しきり」の文化論　大国総
柏倉康夫　コミュニケーションとしきり　教新B
加藤周一　教養はなんのために　教現B
　「知る」ということ　三明B
　創造力のゆくえ　三精国
　二十世紀の自画像　教国総
　日本文化の雑種性　三現B　三精B
　日本文化の三つの時間　大現B
　美しい時間　教現A
　文学の仕事　筑精B
加藤尚武　科学／技術のゆくえ　筑現B
　技術の変質と二十一世紀の課題　教現B
　世代間倫理としての環境倫理学　数現B
　この瞬間を歴史に刻む　明精B
　ボランティアの「報酬」　教新国
金子郁容　思想と向き合う　明精国
鹿野政直　語と意味　第訂国
樺島忠夫　空気を読む　第国総
香山リカ　「ふしぎ」ということ　大国総
河合隼雄　心の鉱脈　東新B
川島慶子　変貌する聖女　明現B
川田順造　記録すること、表現すること　筑現B
姜　尚中　もう一つの知性　数国総
　何のために「働く」のか　東現A
　人はなぜ働くのか　東新B
岸田　秀　恐怖とは何か　大新国
木田　元　技術の正体　三現A
北田暁大　つながりと秩序　三精B
北村透谷　漫罵　教新B
清岡卓行　失われた両腕／ミロのヴィーナス／手の変幻　筑精B
　　筑精国　東現A　東精B　三現B　三精B　教現B
　　教新B　大現B　大精B　桐現B　数現B　第現B
金田一春彦　漢字の性格　大新国
　日本語のこころ　第新国
　コンクリートの時代　筑精国　三精B
隈　研吾　ことばへの問い　筑精B
熊野純彦　〈私〉はどこへ行く？　教現B
黒崎政男　テクノロジーと人間　教新国
　デジタル社会　筑精国
　ネットが崩す公私の境　三国総
　ゆらぐ科学のリアリティー　大国総
　身体への〈疎外　三現B　三精B
　感性とは何か　教現B
桑子敏雄

小池昌代　霧の風景　桐探B
小坂井敏晶　道について　筑精B
小関智弘　支配の役割　桐探B
小浜逸郎　主体という物語　筑精国
　鉄を削る　大新B
　「大人になる」ことの曖昧化　桐現B
　宇宙では「上」も「下」もない？　桐現B
　人はなぜ働かなくてはならないのか　数現B
小林　隆　日本語史の「当たり前」　第現B
小林秀雄　美を求める心　三国総
　無常ということ　三現B 三精B 大現B 大精B
小山慶太　コペルニクスと神秘思想　筑精B
佐伯啓思　欲望と資本主義　桐探B
　ラムネ氏のこと　桐探B
坂口安吾　日本文化私観　教現B
　文学のふるさと　教新B
坂村　健　デジタル・デバイドと自己責任　筑現B
　人工の自然　教現B
阪本俊生　ポストプライバシー　数現B
佐々木健一　コピーの芸術　第訂国
佐藤俊樹　ソメイヨシノ革命　大新B
　桜が創った「日本」　教現B
佐藤信夫　コインは円形か　筑現B
佐藤雅彦　情報の力関係　三精国
　物語を発現する力　大現A
佐藤洋一郎　森に起きていること　第標B
椹木野衣　「あらわれ」と「消え去り」　三精国
　絵画は紙幣に憧れる　大精B
　反アート入門　筑現B
柴田　翔　希望としてのクレオール　第現B
　情報社会のパラドックス　東精B
清水克雄　死と向き合う　筑精B
清水哲郎　言葉の海のオノマトペ　第新国
清水由美　科学の限界　第訂国
志村史夫　近代都市のレトリック　第国総
陣内秀信　ものとことば　三国総 数国総 数高国
鈴木孝夫　自己基準と他者基準　大現A
　人を指す言葉　東新国
　相手依存の自己規定　大現B
　日本語万華鏡　大精B
　「グローバル化」の中の異文化理解　東精B
　〈害虫〉の誕生　第標国
瀬戸口明久　「間」の感覚　第訂国 第国総 教新B
高階秀爾　オブジェとイマージュ　明現B
　居住空間における日本的なもの　桐探B
住原則也　日本人の美意識　大現B
　「美しさの発見」について／美しさの発見　東精B
　　大国総 東新国 桐国総 桐探国
高野公彦　定型があってこそおもしろい　第現B
高畑　勲　眼差しを交わす喜び　三現A
高村　薫　「私」消え、止まらぬ連鎖　三精B
高山　博　仮想化する現実世界　教国総
多木浩二　消費されるスポーツ　東精B
　世界中がハンバーガー　数現B
竹内　啓　地球システムの中の人間　明国総
竹内敏晴　行動としての話し言葉　大精B
竹田青嗣　「自己」について考えること　桐探B
　いたずら　大精国
竹村真一　物語の結末は自分で書き換えられる　大新国
　宇宙樹　筑現B
立川健二　記号論と生のリアリティ　桐国総
田中真知　「美しい」を探す旅に出よう　筑現B
　　第現B
谷崎潤一郎　ありのままの世界は見えない　三国総
多和田葉子　陰翳礼讃　三現B 筑現B
俵　万智　エクソフォニー　筑精B
塚本由晴　殺し文句は永遠に――恋する伊勢物語　大新B
寺田寅彦　治具　教新国
富岡多恵子　科学者と頭　筑現B
外山滋比古　詩人のふるさと　桐探B
　「思われる」と「考える」　明国総
　情報の「メタ」化　三国総
　添削の思想　数国総
　読む　桐現B
中井久夫　戦争と平和についての観察　筑現B
長尾　真　言葉を理解する　明現B
長倉洋海　写真の持つ力　第現B
中沢新一　Not I, not I...　筑精B
　新しい地図を描け　第訂国
　釣りのハイパー・セミオティクス　明精B
長嶋善郎　サワルとフレル　三精B
中西雅之　日本人の「顔」　第現B
中野孝次　物の見えたる光　明現B
仲正昌樹　何のための「自由」か　筑現B
中村桂子　愛づる―時間を見つめる／虫愛づる姫君　明現B
中村桃子　ことばがつくる女と男　筑現B
中村雄二郎　仮面　数現B
　言葉の〈意味〉と〈表徴〉　桐探B
　好奇心　知的情熱としての　桐現B
　目に見える制度と見えない制度　筑国総
　風景はどのように立ち現れるか　第現B
中村良夫　現代日本の開化三現B 第現B 筑精B
夏目漱石　私の個人主義　教現A 明精B 明現B
新納　泉　原始社会像の真実　東精B 教新B

西江雅之　追っかけの精神　第国総
西垣　通　「情報伝達」という神話　数国総
　ネットとリアルのあいだ　明国総
　生命情報・社会情報・機械情報　明精国
西谷　修　いのちのかたち　大現B
　記憶の満天　明精B
　戦争の〈不可能性〉　第現B
　名づけと所有　三現B
　問われる「身体」の生命　三精B
野家啓一　物語と歴史のあいだ　筑現B
野村雅一　自己演技と表情　筑精国
　身体像の近代化　大現B
野元菊雄　言語は色眼鏡である　教現B
野矢茂樹　言語が見せる世界　三精国
　他者の声　実在の声　筑精B
　日本語は非論理的か　第現B
橋爪大三郎　猫は後悔するか　東精B
長谷川英祐　政治の本質　数現B
長谷川櫂　句を切る　明精B
　平気―正岡子規　大新国
橋本　治　あるいは「風」について　明現B
　敬語への自覚、他者への自覚　大現A 大現B 大精B
　文学史はなにを辿るのか　明精B
　働かないアリに意義がある　第現B
長谷川眞理子　平気―正岡子規　東精B
長谷川宏　和の思想、間の文化　大現A
長谷川一　システムとしてのセルフサービス　大新B
　「平等」と「対等」　大現B 大精B
　芸術を楽しむ　筑国総
　自分と向き合う　教国総
　コンコルドの誤り　数国総
　ラップトップを抱えた「石器人」　数高国
浜田寿美　男身体の個別性　三明B 明現B
　持たないという豊かさ　筑精B
　情報の彫刻　第現A
　大量生産の眩暈　大精B
　白　大国総 大精国 数国総 筑現B
　白への跳躍　桐現B
　美意識は資源である　教国総
　メディアとしての顔　明国総
　情報が世界を動かす　明精国
　稼ぐだけが目的か　大精国
　地図の言語と東西南北　筑国総
　イリュージョンなしに世界は見えない　大新B
　環世界　大現B
　人間はどこまで動物か　第標B
　木の葉と光　第標国
　「市民」のイメージ　三精B
　コミュニケーションの文化　三現B
　安心について　第現A
　「共生」の本質　東新B
　福岡伸一　第訂国
原島　博　「センス・オブ・ワンダー」を追いかけて　大精国 筑精国
春木良且　生きることと食べることの意味　大国総 大新国
坂東眞理子　生物の多様性とは何か　東精国 東国総
樋口　覚　絶え間のない流れの中にある生命　三現A
日高敏隆　多様性は人間だけのものか　明現B
日野啓三　動的平衡　筑国総 第現B
平田オリザ　動的平衡の回復　数国総 数高国
廣淵升彦　脳のなかの古い水路　明精B
深津武馬　からだで味わう動物と情報を味わう人間　大現B
伏木　亨　隠れん坊の精神史　筑現B
藤田省三　南の貧困／北の貧困　三現B 三精B
藤原新也　イスラム感覚　桐現B
藤原智美　「検索」時代における読書　大現A 大新B
船曳建夫　文化と理解　大現A
古郡廷治　メディアの豊かさ　第現B
細田衛士　資源はなぜ枯渇するのか　筑現B
細馬宏通　わたしのいない場所　筑現B
細見和之　身体という受動性　明精B
堀田　力　ボランティアという名の「無償財」　大新国
堀井秀之　問題解決の心理学　三明国
前田英樹　絵画の二十世紀　筑精B
　手技に学ぶ　東新国
真木悠介　骨とまぼろし　筑現B
松浦啓一　魚は陸から離れられない　三明国
松浦寿輝　映像文化の変貌　東国総
松沢哲郎　想像する力　三明B
黛まどか　季節の言葉と出会う　大新国
丸山圭三郎　〈読み〉の楽しみ　明精B
　ロゴスと言葉　三現B
　言語と記号　東精B
丸山真男　「である」ことと「する」こと　東精B 三現B
　三精B 教現B 教新B 大現B 大精B 数現B
　明精B 筑精B 筑現B 第現B 桐探B 桐現B
三浦雅士　考える身体　教新国
　身体の想像力　筑国総
三島由紀夫　小説とは何か　明現B
柳田國男　遠野物語　筑精B
水村美苗　〈普遍語〉とは何か？　明精国
見田宗介　感性の考古学―赤い花と紫の貝　筑精国
　鏡の中の現代社会　東精B
　幸福について　明現B
　南の貧困／北の貧困　三精B

港　千尋　テルミヌスの変身　東精国　東国総　筑国総
擬似群衆の時代　三現B　数現B
群衆の顔　明精B　大国総
知識の扉―学ぶことの身体性　大精B
村上陽一郎　科学の現在を問う　第現B
トランス・サイエンスの時代　筑精B
科学・技術と生活空間　数現B　明精B
科学・技術の歴史の中での社会　桐探B
科学と世界観　桐現B
科学者とは何か　東国総
環境問題と科学　第現A
新しい地球観　第標B
毛利　衛　「見る」　第訂国　第国総
茂木健一郎　「普遍性」　桐探B　桐現B
最初のペンギン　東新B
可能無限　大現B　大精B
現実と仮想　東精B
脳と創造性　教現B
森岡正博　「自然を守る」ということ　筑精B
森　達也　僕らの時代のメディア・リテラシー　第標B
森　博嗣　科学的であるために　東新B
個人研究と科学　第現A
森本哲郎　ひかりのどけき春の日に　第標B
やっぱり　大新B
経験の教えについて　教国総
文化とは何か　第現A
八代京子　神話する身体　第標B
安田　登　病と科学　筑精B
柳澤桂子　命は誰のものなのか　三精B
山極寿一　「攻撃」と「共存」　三精国
ゴリラの思いやり　数国総
分かち合う社会　大新B
大現B　大精B

山崎正和　暴力の神話　第訂国
暴力はどこからきたか　桐探B
グローバル化のゆくえ　東精B
サイボーグとクローン人間　桐国総
演じられた風景　筑精国
国際化の流れの中で　東新B
心に「海」を持って　大精B
水の東西　東精国　東国総　三国総　三精国　三明国　教国総
教新国　大国総　大精国　大新国　数国総　数高国
明国総　明精国　筑国総　第訂国　第国総　第標国
山田登世子　文明と文化の教育　大現B
メディアのテロル　数現B
山田昌弘　家族化するペット　大現A　大精B
ヒトはなぜことばを使えるか　大新B
山鳥　重　歳時記について　数現B
山本健吉　自然に学ぶ　第現B
養老孟司　情報と身体　大現B　大精B
吉岡　洋　ヘンデルと力士　三精国
吉田秀和　「かわいい」現象　大国総
四方田犬彦　ノスタルジアと「かわいい」　筑精B
リービ英雄　越えてきた者の記録　数現B
若桑みどり　異時代人の目　筑精B
若林幹夫　メディアと歴史　三精B
景観とは何か　東精B
地図の想像力　教現B　筑現B
遅れてきた「私」　桐探B
魔術化する科学技術　桐探国　桐国総
未来都市は今　筑精国
鷲田清一　〈顔〉という現象　数現B
東国総

「自由」のはき違え　三明B
いのちは誰のものか？　桐現B
こころは見える？　大現B　大精B
ぬくみ　三現B
ふわふわ　筑精B
モードの視線　明精B
モードの論理　東新B
モード化する社会　三現A
わかろうとする姿勢　教新B
顔の所有　桐探国
思考の停止、あるいはためのなさ　数現B
支え合うことの意味　筑国総
自由の制服　第現A
身体、この遠きもの　教国総
垂直のファッション、水平のファッション　筑精国
他者を理解するということ　大大精B
聴くということ　大精国
届く言葉、届かない言葉　東精国
イースター島になぜ森がないのか　三明国
クマの棲める森　第新国
人類による環境への影響　第標国
生物多様性の恩恵　三国総
メディアと倫理　三現B
寛容は自らを守るために不寛容に対して　大現B
不寛容になるべきか　筑現B
「宇宙人」地球以外に生命体は存在するか　筑精B
「生」の音楽という幻想　三明B
トロンボーンを吹く女子学生　筑現B
筑精国

■小説

芥川龍之介　枯野抄　第現B
鼻　第現A　第標B
舞踏会　明現B
羅生門　すべての国総23点
◇『今昔物語集』巻二九第一八　東国総　大国総　大精国
アゴタクリストフ　家　大新国　筑精国　筑国総
浅田次郎　鉄道員　筑精B
名人　第新国　大新B
阿部　昭　三月の風　桐探国
安部公房　鞄　数現B
東新B　三現B　三精B　教新B　筑現B
詩人の生涯　桐探B　桐現B
赤い繭　教国総　東精B　大現B　大精B　数現B
良識派　大国総　大精国
いしいしんじ　果物屋のたつ子さん　東新国
調律師のるみ子さん　第現A　第標B
石川　淳　アルプスの少女　教現B
石田衣良　旅する本　東新B
絲山秋子　ベル・エポック　筑現B
井上ひさし　ナイン　教国総　東現A　東新B　三明B
大新B　明現B　第現A　第標B
井伏鱒二　山椒魚　東現A　東新B　三明B
教現B　大精B　第標B
魚住直子　卒業　第現A　第標B
内海隆一郎　芋ようかん　三明B
相棒　第現A　第標B
待合室　大新B
島の少年－船　第新国

江國香織　デューク　第現A　第標B
子供たちの晩餐　大新国
晴れた空の下で　教新国
カプリンスキー氏　筑精国
その夜のコニャック　大現A
靴の話　三精B　桐探B　桐現B
大岡昇平　俘虜記　東精B　教現B
大崎善生　神様捜索隊　三明B
太田　光　アマガエル　三現A
大田昌秀　血であがなったもの　第訂国　第国総
小川洋子　ハキリアリ　明精B
バックストローク　教現B　桐探B　桐現B
愛されすぎた白鳥　筑精国
果汁　数現B
巨人の接待　大精B　大現B
博士の愛した数式　明現B
飛行機で眠るのは難しい　三精B
オデュッセイア　明現B
ピクニックの準備　三明B
骰子の七の目　第現B
角田光代　ランドセル　桐国総　三精B　教新B
旅する本　数高国　第訂国　第国総　三現A
梶井基次郎　檸檬　東精B　三現B　大現B　大精B
数現B　明精B　第現B　桐探B　桐現B
川上弘美　ほねとたね　教新国　第新国
神様　三国総　筑国総
神様2011　教現B
水かまきり　大国総　大精国　大新国　三明B　筑精B
離さない　大現B
伊豆の踊り子　教現A　大現B
川端康成　雨傘　教新国

幸田　文　濃紺　筑現B
河野多恵子　少女　桐現B
鷺沢　萌　グレイの層　三現B
ほおずきの花束　教新B
サッチシュペリ　指　東新国
志賀直哉　星の王子さま　第新国
灰色の月　大新B
出来事　三国総
城の崎にて　東精国　東国総　第標国
明国総　明精国　第訂国　大国総
清兵衛と瓢箪　第訂国　第国総
三精国　教国総　数国総
重松　清　タオル　筑国総
バスに乗って　第現B
卒業ホームラン　三明国　大新国
シュペルヴィエル　海に住む少女　第標国
高橋源一郎　白紙　筑現B
竹西寛子　神馬　明現B
兵隊宿　教国総
蘭　明精B
太宰　治　トカトントン　大現B
猿が島　筑現B
女生徒　教新国
待つ　教現A
畜犬談　大精B
貧の意地――新釈諸国噺――　桐現B
富岳百景　筑精B
数国総　第訂国　数高国　明国総
東精国　東国総　三国総
明精国　第国総　桐探国　桐国総
葉桜と魔笛　東新B
雪ウサギ　三明国
谷村志穂　沖縄の手記から　数国総
田宮虎彦　ひめゆりの塔　数高国
石野径一郎　東新国　東精国
東精国
東新国

多和田葉子　捨てない女　筑現B
辻　邦生　怖れ　明現B
ティム・オブライエン　待ち伏せ　三国総
中島　敦　悟浄歎異　筑精国
山月記　教現Aを除く全社の現A・B　教現A
中野重治　おどる男　教現B
南木佳士　急須　筑精国
夏目漱石　こころ三現A・教現A・第現A以外の現A・B　筑精国
夢十夜　三国総　教国総　大国総　大新国
第訂国　第国総　第標国　桐探国　三現A
林　京子　空缶　三精国　教現A
葉山嘉樹　セメント樽の中の手紙　三明国　大国総　大精国　筑国総　教新B
原田マハ　いろはに、こんぺいとう　第現A
原　民喜　夏の花　三現B
原田宗典　一瞬を生きる　三明国
半藤一利　十五歳の東京大空襲　三明B
干刈あがた　マスク　明現B
藤沢周平　おぼろ月　大新B
フランツ・カフカ　掟の門　筑国総
別役　実　愛のサーカス　教新B
三浦哲郎　おおるり　桐探B
とんかつ　第現B
三島由紀夫　白鳥　教現A
美神　東新国　大国総
宮沢賢治　なめとこ山の熊　第標国
よだかの星　三現B　教現B　大現B　大精B
宮下奈都　土神と狐　三精国　教国総　大国総　大精国
よろこびの歌　第新国
宮本　輝　途中下車　教新B
村上春樹　カンガルー日和　第標国
とんがり焼の盛衰　東現A　東新B　桐国総　筑国総
レキシントンの幽霊　三精B
鏡　東精国　東国総　大国総　大精国
大新国　明国総　明精国　教現A
青が消える　三精国　大現A
沈黙　筑精B
夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について　教新国　明現B
村上　龍　バラグアイのオムライス　大新B
森　鷗外　最後の一句　第現A
舞姫　東精B　三現B　三精B　教現A
教現B　大現B　大精B　数現B　明精B
筑精B　筑現B　第現B　桐探B　桐現B
高瀬舟　大国総　教新B　大現A
◇高瀬舟縁起　教新B
◇流人の話――『翁草』より　教新B
菊　教新B
他人の夏　教現A
朝のヨット　数現B
神沢貞幹　山川方夫
山田詠美　ひよこの眼　三現B　第現A　第標B
海の方の子　明国総　明精国
話を聞かせて　第標B
山本文緒　頭ならびに腹　桐探国
横光利一　蠅　数国総
数高国
桐国総　三精B
吉村　昭　破船　三明B
よしもとばなな　ざしきわらし　大現A
吉本ばなな　バブーシュカ　明精B
米原万里　みどりのゆび　三精国　東現A　東新B
レベッカ・ブラウン　バグダッドの靴磨き　第現A　第現B　第標B
涙の贈り物　三現B
魯　迅　藤野先生　東現A　東精B　筑精B　筑現B

■教科書略称一覧

東京書籍　301新編国語総合　東新国
302精選国語総合　東精国
303国語総合　東国総
301現代文A　東現A
301新編現代文B　東新B
302精選現代文B　東精B
三　省　堂　305高等学校国語総合　三国総
307精選国語総合　三精国
308明解国語総合　三明国
303現代文A　三現A
303高等学校現代文B　三現B
304精選現代文B　三精B
305明解現代文B　三明B
教育出版　309国語総合　教国総
310新編国語総合　教新国
302現代文A　教現A
教育出版　306現代文B　教現B
307新編現代文B　教新B
大修館書店　311国語総合　大国総
313精選国語総合　大精国
314新編国語総合　大新国
304現代文A　大現A
308・309現代文上・下巻　大現B
310精選現代文　大精B
311新編現代文　大新B
数研出版　315国語総合　数国総
317高等学校国語総合　数高国
312現代文B　数現B
明治書院　318高等学校国語総合　明国総
319精選国語総合　明精国
313精選現代文B　明精B
314高等学校現代文B　明現B
筑摩書房　321精選国語総合　筑精国
323国語総合　筑国総
315精選現代文B　筑精B
316現代文B　筑現B
第一学習社　324高等学校新訂国語総合　第訂国
326高等学校国語総合　第国総
327高等学校標準国語総合　第標国
328高等学校新編国語総合　第新国
305高等学校新編現代文A　第現A
317高等学校現代文B　第現B
318高等学校標準現代文B　第標B
桐原書店　329探求国語総合　桐探国
331国語総合　桐国総
319探求現代文B　桐探B
320現代文B　桐現B